

家庭・保育所・幼稚園

N24  
75(2)

# 幼児の教育



390-38

第七十五卷 第七号 日本幼稚園協会

# 7

絶  
賛  
発  
売  
中

保育室の本棚にぜひこの一冊を！

## 保育専科別冊

# 体育あそび50選

東京教育大学教授 松延 博 監修



一人遊びから集団遊びまで、楽しく遊びながら体作りができる体育遊びを図解で紹介します。その他、運動会への新しい提案、チェックポイントなど運動会にすぐ役立つ記事も掲載。

定価550円

(本誌7月号とも850円)

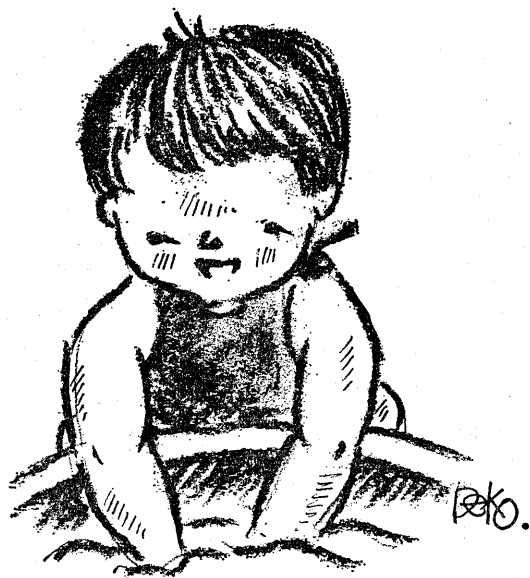
### 内 容

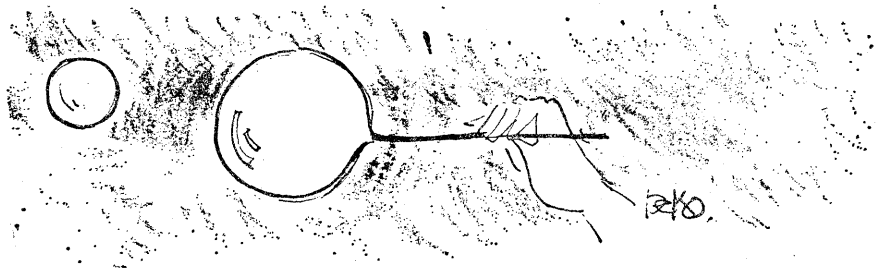
- 現代に生きる幼児のための体育 東京教育大学教授 松延 博
- 体育あそび50選
  - 一人遊び——ジャングルにいこう・探検にいこう・園庭めぐり・クロスカントリー他
  - 二人遊び——それひけやれひけ・いろいろなわとび・丸太ころころ・バランス遊び他
  - 集団遊び——動物鬼ごっこ・ボール渡し・サッカー・バスケットボール・ジャンボ絵合わせ・俵とり・ねずみとねこ他
- 幼児のための運動会への提言 園の運動会を成功させるために
- 運動会の準備とプログラム

フレール館

# 幼児の教育

第七十五卷 第七号





幼児の教育 目次

第七十五卷 七月号

© 1976  
日本幼稚園協会

表紙 永瀬善郎  
 (「もの想う天使」)  
 カット 中島英子

幼児教育第二世紀を迎えるにあたっての提言…………… 荘司雅子 (4)  
 はじめてのアメリカ・メキシコの旅(上)…………… 周郷博 (7)

どろ…………… 秋山達子 (16)  
 泥三昧…………… 田中澄子 (18)  
 土・どろんこ…………… 高橋季愛 (20)  
 おもしろかった粘土遊び…………… 長山篤子 (21)  
 泥…………… 加藤徳弘 (23)



保育の中の小さなこと大切なこと④	守永英子	(26)
乳幼児の人格形成(一)	中沢たえ子	(28)
「日本幼児保育史」研究余滴(五)	岡田正章	(34)
「それぞれの子どもらしさを求めて」より(九)		(40)
「幼児の自然認識と教育」の研究(二)		(44)
学校訪問旅行記(その三)		
—— 伝統を感じるイギリスの教育 ——	村田修子	(56)

編集委員 勝部真長・堀合文子  
 本田和子・河合祥子  
 編集主任 津守 真・水田順子

## 幼児教育第二世紀を迎えるにあたっての提言

莊 司 雅 子

明治九年（一八七六年）に東京女子師範学校（お茶の水女子大の前身）にわが国最初の幼稚園が創設されてから、今年で百年になり、やがて幼稚園教育第二世紀を迎えようとしています。過去の一世紀のわが国の幼児教育を顧み、その功罪を語り、共に喜び、共に嘆くことも、きわめて有意義なことではあります。しかし単に過去はこうであった、ああであったという回顧談だけでは、何の進歩も発展もありません。過去の事実が今日の私たちに何を語り、何を教えているのか、また現実の状況はどこからあらわれ、何に起因しているか、そしてこの現実はやがてどんな未来を作り出すか、といったことを考えることこそ、歴史を学ぶ意味があると思います。「現在は過去を背負い未来を孕む」という哲人の言葉は、私たち歴史を学ぶものにとって尊い教訓であります。

ところでわが国の幼児教育の歴史は、ここに一世紀を経てき

ましたが、この百年間の歩みが現在の幼児教育に何をもたらしたでしょうか、またそれが如何なる方向を示しているでしょうか。

まず客観的な発展として指摘されることは、幼児教育施設や幼児数の量的増加であります。というのは明治九年に発足した全国唯一の幼稚園は、選ばれた少数の幼児のためのものでありましたが、百年後の今日では、幼稚園も保育所もすべての幼児のために開放されています。そして幼稚園の数が一万三千、保育所の数が一万八千、合計三万以上に増加しています。幼児数も、幼稚園と保育所を合わせれば三九〇万以上にふえています。その増加状況は国公私立のうち、とくに私立がいちじるしく、地域によっては、幼児教育はほとんど私立に委ねているところがあります。この量的増加は、明らかにわが国幼児教育の向上を物語っています。しかし量的増加は、直ちに進歩を意

味するとはいえないと思います。ある点においては、この量的進歩は初期の幼児教育に比べて、むしろ質的遅れをもたらしているといつ指摘することもできます。たとえば初期においては、なるほど今日のような科学的な保育方法はあまり見られなかったかもしれないが、一人の保育者の受けもち幼児数が十数名であったことは、ほんとうの保育ができたと考えられます。少なくともひとりひとりの幼児に接する時間を保育者は十分もち、個性や創造性を伸ばす機会にめぐまれ、幼児の性格を豊かに育くむことができたはずであります。もちろん当時は、ひとりひとりの幼児を個人としてよりは、むしろ社会集団のなかで社会性を育てることの必要性が優先していたから、保育の形態は今日と同様に一斉保育が主であったようであります。それにしても、小人数のグループで社会性と個性を同時にのばすほうが、特に幼児期には必要なことであります。ところが幼児教育の重要性が認められるにつれて、一人の保育者の受けもち幼児数がふえてきました。その理由はいろいろあげられますが、今は頁数の都合上、それをあげる余裕はありません。

とにかく今日のように一人の保育者が四十人の幼児をもつようであつては、必然に教室における授業のような一斉保育をとらざるをえないようになります。保育者がひとりひとりの幼児

に接することはきわめて困難となり、幼児は幼稚園で歌や遊戯、絵や製作、または文字や数字を学習して帰ることになります。ところでこのような学習中心の保育に対して、自由保育と称して、多数の幼児を狭い園内で自由な遊びをさせ、保育者は忙しく幼児の間を動き廻りつつ遊びの指導をしています。一見、幼児をのびのびさせながら保育しているようであるが、ややもすれば自由保育でなく放任保育になりかねないようであります。つまり一方では、お歌学校、お遊戯学校、お絵描き学校、はては読み方学校、書き方学校のような幼稚園かと思えば、他方では、幼児遊園地のような幼稚園が年々ふえてきています。過去百年の幼児教育の歩みが今日このような結果をもたらし、そしてこの姿で第二世紀に入ろうとしています。しかも今日のような幼児教育が未来に何をもちたらずであろうかを思うと、きわめて寒心にたえないものがあります。そう思って、私は幼児教育第二世紀に向つて、次のような提案を試みたいと思ひます。

まず第一に、保育者教育の改善をはかることであります。イギリスやフランスに見るように、教師と保育を専門職にするこトです。教師はあくまでも幼児の知能と性格と体力を育てる専門家でなければなりません。そのためには四年制大学を卒業し

ていることを最低の資格とすることです。保母は育児の経験をもつ既婚・未婚の女性を入学資格として、一年制の保母学校で、主として保健・衛生・しつけに関して学習し免許状を取得することを最低の資格とします。

幼稚園は三歳以上の幼児であればすべて入園を許可し、そのうち早く登園したり遅くまで残ったりする働く親の子どもは、保母がいわゆる幼稚園の時間の前後の世話をし、一定の保育の時間は専門教師が担当します。つまり同じ施設で二つの保育機能をもつことです。保育所は三歳未満の幼児が入り、同じく教師と保母が指導します。

そのためには教師は四年制大学で、一般幼児教育学と心理学、社会学と医学を学習する以外に、○歳から三歳まで、三歳から六歳までの幼児期の発達と教育をそれぞれ専攻し、専門の免許状を取得する必要があります。つまり三歳以上の幼稚園の教師と三歳未満の保育所の教師を専門職にすることです。このような専門の教師を養成する大学の教授は、必然に単に教育学や心理学の専門家であればよいとか、美術や音楽、国語や社会、理科や数学の専門家でさえあればよいというわけにはゆきません。幼稚園や保育所の教師の養成大学の教授は、いずれも

幼児の発達と教育に関する基本的な教養をふまえてから専門の講義をする必要があります。

次に運営面に関していえば、一人の教師や保母の受けもつ幼児数は、幼稚園で三歳児であれば十二名、四、五歳児であれば二十名を越えないことです。

一つの園の幼児数は百人を越えないようにします。

教師や保母の勤務時間は原則として一日六時間とします。

幼稚園・保育所の運営費は公立・私立を問わず、国と地方自治体と親の三者が負担します。

以上の提案をあえてここにしたわけですが、もちろん今すぐこれが実現できるものではありませんし、またたといそれが実現されるようなことがあるとしても、その過程においては、古い体制に多くの支障を生じさせ、犠牲をはらわせなければならぬようになりましょう。しかしこのことを恐れていては、何の改革もありえないと思います。国家百年の計を考える時、そしてこれから第二世紀に入るわが国の幼児教育の未来を考える時、以上の提案は決して完全な理想ではないにしても、理想への第一歩として考えられるのではないかと存じます。

(聖和女子大学)



## はじめてのアメリカ・メキシコの旅(上)

周 郷 博

# H



▲ルイスさんと筆者

昨年の十一月二十四日から暮れの十二月十四日まで、ごく短い期間だったが、私ははじめてアメリカ——そこから足を伸ばしてメキシコの旅をして帰ってきた。

アメリカとラテン・アメリカ諸国は、一九四五年の敗戦後まったく急に日本と「新しい」「近しい」関係にはいった地域であるのに、私はアメリカへ行ってみたいなどとは思ったこともなく過してきた。メキシコや南米（ブラジルやチリー）は「遙かな国、遠い国」のまま、そこまで行ってみるなどということは考え及ばなかった。小学校の五年生のとき、ブラジル移民を「まじめく

さって」考えたり、十三、四歳のころ、アメリカへ渡ってみたくて横浜の岸壁に一人で座って小半日海の彼方への憧れを少年の胸に燃やした日もあったが、それも「遙かな昔、遠い昔」。ブラジルにいる二十数年前の教え子とときどき帰ってきて向うの話を親身に話してくれたり、最近の幼教の卒業生田村さんと子にメキシコからチリへ行ってガブリエラ・ミストラルの墓を訪ねたりしてきた話を聞かされても、メキシコや南米は遠い存在——そんな中南米の開発途上国の苦境Ⅱ問題を（教育

とからめて)ぼんやりとながら実感しはじめたのはイワン・イリ  
イツの本を読んでからのことにすぎない。

アメリカ——は、日本の敗戦、長期にわたる占領によってヘン  
なかたちで「近過ぎる!」。「表面的なアメリカ化」はもうたくさ  
んだ、という旋毛曲(つむじま)がり(が)が心根にあつて、イギリスやヨーロッパ  
の方から見るのが着実、という気がして、ヨーロッパのほうへ目  
を向けることが多かった。敗戦八年目の夏、「偶然な運命から(中  
国から航空切符が来た)」「ウィーンの「世界教育者会議」という集  
まりに「参加」出席したのを始めとして、その後ロンドンの「人  
類の未来のためのテイヤール・センター」の会員になったことも  
あつて、四回もヨーロッパへは行つた。最近は、とくに六〇年代  
末(附属幼稚園長を兼ねたころ)からは、それと併せて「中国か  
らの視点」というものの重要度をつよく感じている。ともかく、  
エゴと無感覚の退廃のひどい「島国根性」(井戸の中の「みにく  
い蛙」)の心境から脱けだして、ひろい世界の「流れ」の中にわ  
が身(とこの祖国)を置いてみることはなしには、人生の問題も教  
育の問題もほんとうにわかることはない(というのが私の切なる  
本心なのだ)。

昨年(の)春、カナダの西部へいくチャンスがあつて(それを私は  
断つたが)、そのことからルイスさんが二十五年前の「FEB」(幼

児教育の指導者養成)の受講生(年をとつた「教え子」)たちが  
ルイスさんを訪ねてくれるといいと楽しみにしている気持ちをル  
イスさんの手紙から私は感じとつていた。そのチャンスを外(はず)  
し行けなかつたから、私はいつそうルイスさんの心を感じて「アメ  
リカへ行つてみよう」という気持ち(が)が動いていた。しかし、なん  
といつてもアメリカの「ベトナムからの敗退」——これが私をア  
メリカの旅に誘つた何よりの誘因。「強いアメリカ(力の信者で  
あるアメリカ)」には反発したが「敗けて名譽を持ち直そうとし  
ているアメリカ」には深い共感を(勝手に)感じる。私は百年前  
のアメリカ、フォスターやホイットマンのアメリカが好きだ。  
「大草原の小さな家」に描かれているアメリカ。ジョン・パエ  
ズの反戦の歌やジョン・デンバーの「Sweet Surrender」に通じ  
る、「ベトナム戦争に見ると全くちがう」また「アメリカ化し  
た日本」とも全然ちがう、心底からのヒューマニズム——「よき  
素朴なアメリカ」に出会えるかもしれない。一七七六年のアメリカ  
カ独立(建国)から二〇〇年——ちよどよい「反省」の時機と  
して回つてきている。

メキシコのほうは、一九七二年からおよそ一年、私のお茶の水  
女子大に「留学」していたマリヤさんにたびたびせがまれていて  
「行つてあげたい」と思つていた。ちよどよい機会にめぐまれ

た、というわけだが、国際婦人年のころ、黒沼ユリ子さんの書いたものを読んだり、そのまゝに鶴見俊輔がユリ子さんのご主人リカルドーさんのことなどといっしょにメキシコ滞在中に考えた愉快な文章を読んでいて、漠然とながらメキシコという国を肌で知りたいという気持ちがあった。然し、何よりメキシコへ行くことで私の心にあつたのは、「イリイッチ・ショック」ということで知られる、世界の教育改革（大動乱）の「予言者」のような位置にいる、あのウィーン生まれの元僧職者イワン・イリイッチにひよつとしたら会えるかもしれない、ということがあつた。黒沼さんも、荒唐のひどいインディオの部落で、夫のリカルドーさんとやつている。「部落の自立のための」しごとの中で、モンテッソーリの教育方式で部落の子どもたちの教育をしているという、そこへ連れていって見せたい、という好意を、毎日新聞の安東美佐子さんを通じて知らされていた。

### はじめてのアメリカ

個人の公式の旅費六十四万円ということもあつて、旅行会社が目算した参加者十五人には達せず、参加者わずか八名ということになり、当初予定したメキシコ行きは切つて、アメリカだけの十四日間の旅ということに落ちついた。「倦み」疲れて「悲惨」(Dy-

derived misery) ということばでしかいえない、現在の「教育」と日常生活(Ⅱ人生)にくらべて、二十五年まえの日本は、貧しく、傷心、欠乏の時代ではあつたが、「そこへ」どんな詩をかくか」は人間の決意次第だつた。まだ全く「白紙の状態」であつたころ——ルイスさんを中心に集まつた人たちの「初心」を思えば、もつと集まつてもよかつたのにと悔まれたが、八名というのは手ころで、そこへコスモポリタンの玉生嶺里君と私がいって一行十名でかけた。

十二月二十四日の夜羽田を発つて、ハワイ経由でその同じ日の十時に(時差による)ロスアンジェルズについたが、翌日二十五の月曜日は、疲れ休めに午前中、空港ホテルのマリオットでぶらぶらして、午後は市内見物——ハリウッドの俳優たちの住むサンセット・ヒルなどをバスで案内してもらつて、日の暮れまで市場を見たりして歩いた。はじめてのアメリカの旅の第一日だが、そのバスに私たちといっしょに乗つていた一人の若い女性の眼差しが私にはまず印象に残つた。降りたり、また乗つたりする度ごとに、何か、さびしい、悲しい眼差しでにっこり会釈をする。まわりの人と話しているのを聞いていると、高校を卒業したのだけけれど、ただ一人でこんな旅をしているのだと言う。ヒッピーではないけれど、アメリカの若い人の心が感じられるようで「話してみ

たい」気持ちがあった——カリフォルニアの北のほうの奥できびしいコミュニケーションの生活をしているアリソア・ローレルという人（「地球の上に生きる」という変わった本を書いている）も、この人から想像したりした。日がとっぷり暮れてから、またおなじバスに乗りこんできたが、一人でさびしそうに降りていった。ともかく、日本の若者たちとは何かちがう、アメリカの大きな変化に「耐えている」ものの表情を見た感じがした。市場——というのも、またなんという「気楽」な、解放的なところか！ 果物屋のおやじさんも日本人と違って愉快に話しかけてくるし、コーヒーは一回飲めばあとは何杯でもただだし、バスの運転手などもそこへ二、三人集まってくつたくな話に興じていた。失業者が多いといったって、土地は広いし、何かに「追い立てられて」いらしているところなどはないのが、私は羨しかった。いまの日本とは大違いの、田舎くさくゆったりした、こせこせしないアメリカを見た気がしたのは私の思い過したっだろうか。

その日の夜の十時、ロスアンジェルス空港をとり立って南のフェニックスという町に十二時ごろ着き、そこから夜間飛行でワシントン郊外のダレス空港に夜明けに着いた。夜間の移動が重なって疲れてはいたが、東部の冬の始めの草原と林の広々とした道を空港から一時間たっぶりバスで走って眺める風景は、せせこま

しい日本とちがって心が生き返る思いがした。

ホテルにはいって、午前中は黒人が八割を占める、ある住宅街はガラシとして、空家同然のかつての白人たちの「立派な」邸宅に、壊れちらかったままで黒い人がぼつぼくと住んでいる町を見てもまった。アーリントン墓地、衛兵の交代、ポトマック川、ウォーターゲート……フォード大統領が近くの教会へ来るというので出かけていった人たちもいるが、私はホテルでぼんやり考えごとをしていた——アメリカの民主主義が想像もできない大変化の渦中にあるのだということをよく理解してみた。動いているアメリカ。これにくらべて、日本は、敗戦後数年のあいだに「できた」ものがたたいよいよ身動きのできない固まりかたをしているだけ（誰が、何がそうするのか？）。四、五年前にアメリカの議員を交えた調査団が日本の教育の調査にきて、「アメリカの教育はその後大へんな変りかたをしてきたのに、日本の教育は占領時代のままで、教育の意味を考え直すことなどせず、それをへ上から（文部省が）統制で締めることしかしていない。これは日本の子どもたちの未来を暗くしている」と報告書に書いていた。「誰かを愛するということは、彼らに成長の余地を与えることだ（To love someone is to give them room to grow）」と、どこかの学校の教室の壁に書いて貼ってあるのをその後見たが、

日本にはその「余地」も「愛」もなく冷えきっているとしか思えない。

その日の午後は、ルイスさんが紹介してよこした「幼年教育協会インターナショナル」のミス・アルベルタ・マイヤーさんを訪ねることで過したのだが、長距離の「旅の疲れ」で、私も通訳の玉生も頭の働きがわるく先方に失礼を重ねるばかり——せい高のつぼの、係の若いお嬢さんから「あなたの気持ちよくわかります」などと慰められたが、この静かな建物の中の三人の「人のよさ」は、日本にはない。あの亡くなった絵本作家バージニャ・バートンに通じるような、「澄んだ理想主義者」の集まりという感じだった。そこで「セサミ・ストリート」は「知識に片よっていて」賛成がたい、と聞いたのも、日本でもてはやすのと違っていて、納得できた。アメリカの幼児教育の最近の移り変わりについて要を得た印刷物をいくつかもらったが、このことは後で、まとめて書くことにする。

ニューヨークへ着いたのは土曜日。この大都会には、世界中のいろいろな人が集まり、いろいろな考えの人が集まっているのだが、次の日も日曜なので自由行動に任せるしかない。町の通りにたむろしているアル中の人たちの空ろな目、町角で物売りをしているプルトリコ人……セントラル・パークの向うは危険だとも

聞かされて、私は本屋をぶらついたり、ホテルでぼんやりしていた。

ニューヨークで、私は私だけのしごとを二つもっていた。一つは、一九五五年の四月十日にここで突然昇天したテイヤール・ド・シャルダンの墓を訪ねることだった。私は前日の晩、その四月十日のミサにテイヤールが出たという、セント・パトリックスというカテドラルのミサに出た。そこでテイヤールの墓の所在を訊ねたがどうもはっきりしない。ミサのあと隣同志で握手をして「平和の誓い」のようなことをして帰ってきたが、テイヤールの墓は、日本でしらべに行った、ハドソン川を五〇マイル溯ったセント・アンドリウスという教会の墓地を、車で自分で探すことにした。しかし、日が暮れてしまってセント・アンドリウスには辿りつけず、ワシントン・アーヴィングの昔の住居、サンニー・ヒルを案内してもらって、暮れぐれの帰途、田舎風の店で、同行の女性二人とコーヒーを飲んで引きあげてきた。

もう一つは、ニューヨーク市立大学の生物学の教授、ドクター・アーノルド・ローズさんから ICIS (International Center for the Integrative Studies) の短い原稿を依頼されていて、その打ち合せみたいにして会う筈にしていた。この ICIS のメンバーに日本から私とジャン・フリッシュュさんがえらばれている。それも土曜、

日曜で（すぐ近くの五番街が事務所なのに）、早々にハートフォードへ飛び立ってしまった。ニューヨークの下町のようなところの私立の ABC Child Care-Nursery School and Kindergarten という所へみんな訪ねたが、これも後でまとめて書く。

## アマースト

ハートフォードの空港を出たら、イギリス風の品のいい老運転手が中型バスを用意して待っていてくれた。それに私たち十人が乗りこんで、ロングメドロー、スプリングフィールド（ここから右へ折れる大通りはポストンへ行く）、ホリオークなどというイギリス風な名前の町を通って、いかにもニューイングランドらしい風景の中を一時間半ほど走り、正午前に、ニューイングランドの大学町アマーストの、町はずれの小さなホテル（Motor Lodge）のところどとまった。バスから、道路傍の草原に四人の女性が立って待っているのが見えた。近づくると一人はルイスさん、それからタットマンさん、それに、なんの連絡もできないでいたのに、昔の下牧さん（いまは英子・ウェイマンさん）がきていた。もう一人は、タットマンさんの姪の若いヘレン・カーティスさんだった。バスがとまるのを待ちかねて、かけ降りて私たちは抱きかかえるように互いに「再会」をよろこび合った。ホテルの田舎風の

ロビーに落ちついて、私たちはタイプに打ったアマーストのスケジュール（予定表——次頁参照——）を渡された。一人一人胸に名前をつけて（先方も）滞在中の予定を楽しいユーモアを入り交えて説明をきいたあと、一時半に迎えにくると言って四人は帰り、私たちはホテルで昼食をした。

一時半には、三台の車で迎えにきてくれて（社会学のウィルキンソンさんや他も交って）アマーストの五つの大学、マサチューセッツ、スミス、マウント・ホリオーク、アマースト各大学を見せてもらい、三時から四時、早目のディナーに呼ばれた。ちょうど、この地に由緒ふかい「感謝祭」で、大学も店も休日だったのに、若いお嬢さんに来てもらって、ローソクを灯した、古風なレンガづくりの宿（Tim）の一室の長テーブルをかこんで、七面鳥の料理をいただいて歓談した。その情景は忘れがたい。底なしの人のよき、厚意、友情、知性のこぼれるユーモア……はるばる海を渡って大陸の東北部のここまできて、こんな心が生き返る友情に迎えられて、私たちは「来てよかった！」と誰もが（物語りにあるような）「故里へかえった」<sup>ホーム</sup> 思いを味わった。その日は「眠りをとりもどす」ために早目にホテルに帰してもらったのだが、帰りぎわに、そのディナーに呼ばれた Tim のすぐ傍に、これはその昔、札幌農業学校に來たウィリアム・クラークが、その頃日

本から持って帰ったという桂の木が、天を指すように枝をはたてどっしりと立っており、その幹に「桂」と漢字で夜目にもわかるように書いてあるのが目にとまった。

翌日の月曜は、午前も午後も「予定表」にあるように幼稚園や実際の見学、研修（これも、まとめて後に書く）で、その晩は七時半から、ルイスさん、タットマンさん、ヘレンさん三人が住んでいる家で「お茶とデザートのみ集まり」があり、マサチューセッツ大学の幼児教育の教授デーヴィッド・デイさん（北海道大学で講義をしたことがある）が話をしてくれた。

——ところで、三日目の午前中はたっぷり「空いている」ことを知って、ルイスさんはその「計画」を相談したのだろう、急にタットマンさんの農場へ私たちを連れていってくれることになった。二台の車に分乗して、アマーストから一時間あまり、コンウェイというところから右に折れて、ほんとうにアメリカの牧歌的な田園風景の中のタットマンさんの農場を訪ねた。そのあたりにはタットマン家だけ、といった広々とした草原と原始林の中のタットマンさんの農家で、私がどんなに「慰められ」くつろいで心地をとりもどしたか。帰るとき、ルイスさんが「あなたはここに残ったほうがいい」と私に冗談を言ったくらい。清潔な牛舎、あの仔牛、ずっと遠くから私たちを見ていて、帰るとき途中まで

### Sunday

Greeting at Howard Johnson Motel

Rest until 1:30 P.M.

Tour the Five Colleges in and near Amherst -- University of Mass.

Smith, Mount Holyoke, Hampshire, and Amherst Colleges(1:30-3:00 P.M.)

Dinner at the Lord Jeffery Inn, a typical New England Inn(3:00 - 4:00 P.M.)

Howard Johnson Motel, with chance to "catch up on sleep".

### Monday

Breakfast, Howard Johnson Motel

A day of school visiting:

9:30 - 11:15 A.M. Kindergartens in the Wildwood School

Principal: Miss Nancy Morrison

Lunch, Howard Johnson Motel

12:30 - 2:45 P.M. Kindergartens in Marks Meadow School

Principal: Mr. Michael L. Greenebaum

Free until 7:30 P.M.

Dinner at Howard Johnson Motel

7:30 P.M. Dessert, with tea or coffee, at the home of Jean Lewis,

Ruth Totman, and Helen Curtis

8:15 P.M. Talk by Dr. David Day, Professor of Early Childhood Education,

University of Massachusetts.

---

Guest translator: Mrs. Alex Wayman, formerly Hideko Shimomaki of Japan

ついて来て、そこで見送っていた犬……牛でも犬でも、日本とはちがって「親しみ」と何かの気品をもっている。「あわてて」いない。「考えながら」支え合っている生命のいとなみ。道の途中の林のへりに薪でも蔵たくわっておく小屋のようなものがあつたが、タットマンさんたちが子どもころ通つた学校だ、とタットマンさんが言った。そんなアメリカの素朴なものに出会つたのは私はいれしかった。日本の「アメリカ化」の醜さも思い併せると私は口惜しかった。

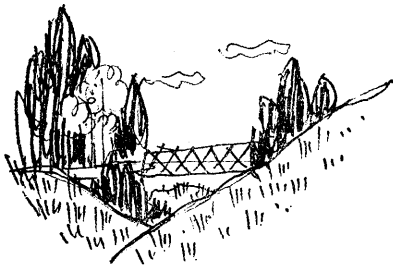
思えば、ルイスさんが（占領軍の「計画」に割り込んで）日本へ来てくれたのは、敗戦後四、五年たつたばかりの頃、——あれから二十五年（四分の一世紀）という年月が流れ去つた。

年月が「流れ去つた」と、偶然こう書いて——だが、それからしばらくして、六〇年代を頂点にしての技術革新、経済大国一逼倒の暴走で、「流れがとまったもの」のあるのに私はハッと気づかされた。「年月が流れ去つた」ら、「春がめぐってくる」とか、「友情が芽生えてくる」とかいうものなのに、その十五年あまりの間に、汚染物が（雑多な知識もふくめて）溜たまるばかり。人の心の「流れ」さえも、「流れがわるく」なり深い共感が失われて「体温の低下」がひどい。年月というものが、この日本と私たち日本人の心にいったい「流れ」ているのか。「流れ（歴史の流れ）」がそ

の神秘を見せてくれているのだろうか。

アマーストの三日間は、アメリカの旅で学んだすべてを集約する「意味のふかい」三日間だつた。戦後三十年の激しい変化を生きてきて、二十五年を隔てての「邂逅（出会い）」の中で、私たちは何やら「道しるべ」になるものと遭遇した思いがあつた。その感懐を短い英文に記し（あとで帰国後日本語ですこし長くまとめた——次頁参照——）そこへ「記念」にみんながサインした。それを、昔のI・E・E・Tの受講生たちに送り、アメリカへも送つた。

（以下次号に続く）





私たちはとうとうアマーストまでやってきてルイスさんと落ちあった。ルイスさんと彼女をとりまく愉快で気持ちのよい友人たちが、由緒ある静かな東部ニューイングランドのこの大学町とその自然＝風景とともに、私たち日本からの訪問者を快くその懐ろに迎え入れてくれた。

「夢のような」3日間だった。秋の終りのアマーストでの、日本では想像もできないこの親愛と友情の出合いの「よろこび」を、25年前の日本でのルイスさんの幼児教育 IFEL に集まった昔の学生たちに知らせ分ちあって、いっしょに幼児教育の道筋を求める初心とさわやかな知性をもち直すすがにしたいと、私は願わずにいられない。

およそ100年前、このアマーストの大学のW・クラークが札幌農学校へやってきて明治初期の日本の精神的目ざめに大きな灯りと導きになったことが思いあわされる。そうして25年前、敗戦直後の欠乏と傷心の私たちをルイスさんはその不思議な魅力＝引力を持った人柄とヒューマニティーを持って勇気づけ、幼児教育をつうじて人生の（人間の）道を教えてくれた。私たち日本の、二つの歴史的瞬間においてのアマーストと日本との因縁に何か建設的な意味が感じとれる思い——ルイスさんは忘れがたい人だった。

25年前のルイスさんに挨拶と感謝をのべるためにアメリカに行く——そんな漠然とした気持ちがあつてにわかにアメリカ旅行となったのだが、アマーストへきて、ほんとうに生きているもののいのちと愛＝友情が枯れることのないことを深く思い知らされた。100年前の「少年よ大志をもて」は、いまこの私たちにとってどんなことばとして「生まれかわる」べきなのだろうか。1952年の初夏、ルイスさんは私たちに「あなたのよき仕事に勇気をもて *Courage to your good work*」と、アメリカから私宛に電報を送ってくれた。変転激しい歴史の流れの中で、その「よき仕事」の実を私たちはほんとうにつかみたい。

Dec. 2nd. 1975 Amherst, Hiroshi Sugō

# どろ

## 秋 山 達 子



狭い田舎道をバスが道幅一杯に走って行く。昨夜降った雨のせい、空が抜けるように青く、澄みきって、鯉のぼりが幾つか、ところどころの農家の屋根にひるがえて、気持のよい朝だった。ふと道端の溝の中に女の子が一人、うずくまって、一生懸命になにかやっているのがみえた。あの子、何をやっているのかな、あんなに道の傍でバスが通るのに危ないな。彼女はどろの中にべったりと坐りこんでしまって、どろこねとおだんご作りに夢中だった。バスがその溝とすれすれに走りさった時も、彼女は顔もあげないで、どろだらけになりながら、せっせとどろのおだんごを作って、溝のふちに並べていた。私はふと、子どもの頃、同じように雨あがりの日に、どろだらけになって、水たまりをかきまわし、ぬるぬるしたどろの感触を楽しみながら遊んだことを思い出した。それから、どろのごはんやお魚を作って、おままごとをしたことも。その後で、頭

からどろだらけになって、いつも母親にしかれたことも……。忙しい毎日の中で、めったに思いだすこともない、子ども時代の記憶のこまである。

情緒障害児とよばれる子どもたち、彼らに水彩えのぐを渡して、絵を描いてもらうと、たいていの子が、いろんな色をませあわせて、画用紙をどろどろの茶色に塗りたくってしまふ。他の子どもたちは、ちゃんと赤や青を塗りわけて、きれいにお花や小鳥を描くのに、どうしてこの子たちは、形にならないどす黒い絵になってしまうのだろうか。一人の子はえのぐにえのぐを塗り重ねて、とうとうだらだらとまわりに流れだした画用紙を二つに折ってもちあげて、こぼれおちるどろのようなえのぐをみながら、「怪獣の血だぁ」と叫ぶ。それから、画用紙を踏んで、踏んで、踏みつぶし、やっと安心したように、また新しい紙にむかって、もう一度、えのぐのどろこね作業をはじめ。色鉛筆

ヤクレヨンの時は、他の子たちよりも、ずっと几帳面な、四角や線を描くのに、どうして水彩になると、こんなにとろとろにしてしまうのだろう。きっとこの子は絵を描いているのではないのだ。えのぐをまぜること、どろのような色や、べとべとした感じと遊んでいるのだ。そしてこの子にとつて、それが、なんとなく薄気味悪く、そのくせ楽しくて、どうしてもやめられないのだ。どろのもつ魅力、どこか暖かく、柔らかい感触、それは子どもばかりではない。おとなの我々にも、懐かしく思いたされるものである。

どろの魅力はどこからくるのだろうか。インドの神話では、この世界はどろのような乳海を泳ぐ亀の背に支えられているという。日本の神話でも、どろどろの海から国造りが始まったという。キリスト教の伝統では、混沌は空を覆う雲であらわされるが、東洋では混沌は泥土である。そしてその泥土の中から、子どものおだんご作りのような創世の神話が生まれる。溝の中で一生懸命におだんご作りをしていたあの女の子は、この世界を、そして、月や、星や、太陽の輝くこの宇宙を作りだそうとしていたのだろうか。

それとも、混沌とした無意識の大海から芽生える小さな自分自身を、作りあげようとしていたのだろうか。もちろん

ん、子ども自身が、あれこれと意識しておだんご作りをしていたわけではない。ただ、おとながいろいろと理由をつけて考えてみるとすれば、そこに創世の秘密が感じられるように思う。いずれにしろ、あの女の子が、なにか大きなみえざる力によって、動かされてでもいたかのように、おだんごを作っていた姿は印象的であった。

混沌には竜が住むという。西洋の竜は、迷妄の暗雲の中から舞い降りてくるが、東洋の竜は、泥土の中から舞い昇る。中国古典の中でも、占いとかわりがあるのによく知られている易経の最初におかれた卦は「乾」とよばれて、天の象徴であるが、そこでは竜が泥土の中から次第にあらわれて、天に昇る姿が詳しく描写されている。そして最後に、どろの中からは美しい蓮の花が咲く。

どろの中には竜のような怪物も住むし、聖なる花の種もひそんでいる。どろに親しむことによって、子どもたちはすこやかに成長する。どろを知らない都会の子たちはかわいそうだ。せめて、幼稚園や公園のお砂場で、大いにおだんご作りに精をだしてほしいと思う。

(大正大学)

## 泥三昧



田中澄子

毎年のことながら砂場での遊びがもの足らなくなった子どもたちは、他の遊びや遊具などには目もくれず、園庭へと進出して遊びを広げる。そこには永い年月培われた固い土があり、砂場では味わえない魅力が潜んでいることを知っているからに他ならない。

子どもは遊びの天才といおうか、どんなに頑固な土であっても小さな手がこわして、目的を叶えてしまう。

脇目もふらずに土を掘り、それを篩にかけて使いわけ、時には泥にしてしまう素朴な遊びに、時間、空間、処などにとられない自然と一体となった、三昧境の姿をみる。

いつの年も、どの子も楽しむ泥三昧に、伝統的な鉄マン作りがあるが、鉄マンとは泥でつくった饅頭ではあるが、子どもは鉄よりも固いと信じており、その年の名人も生まれる程の身の入れようで、コンクールをみるのもまた楽しい。名人ともなると誰よりも大きくて形よく、ピカッと黒

光りして貫録あり、その上、落としても絶対にこわれないものを作らねばならない。厳しい条件ではあるがこれがまたこたえられないとみえて、夢中になって競いあう。私も虜になってとうとう名人に弟子入りした。

先ずは入門の巻。

鉄マンは土作りが第一ということで、足許の土を掘りはじめたところ「先生あかん。ここの土は悪い」とストップがかかった。名人曰く。土は、

①地表は白くてサラサラして、下の土は黒くて固く、擦ればツルツルになって黄色く光ってくるのが最上とのこと。

②ザラザラしたのやジトツとした土はこわれやすいので、必ず手で確かめること。

等の予備知識を与えて、良い土のある場所へ案内して、実地教育をしてくれた。そこは園庭の塀の下、すべり台の傍、花壇への道などで、全く思いもよらない所ばかり、一

見して他の土との違いがわかり恐れ入った次第である。それにしても、園庭の土はみな同質とばかり思いこんでいた自分の単純さが恥ずかしく、何時の間に広い園庭で見つけたのかと改めて感心もした。

今にして思えば、雨が降っても傘をさして園庭の水たまりへ入り、ピチャピチャと泥の跳ねるのを面白がったり、両手で泥をすくいと指の間からこぼれる泥をじっと見入っていたこともあった。晴の日は金槌とスコップを手にして友だちと園庭を掘りまわり、先生から注意されていたことも何回かあったが、何れもそれは土の研究をしていたと知って、息の長い努力に対して改めて最敬礼したのである。

そこでいよいよ工程だが、

①地面の砂は静かに払い取って下の黒い土を手でこする。

②土がツルツルになればそこへほんの少し水を落として泥をつくる。

③それを少し取ってキュッと固めるが、このキュッがコツで一寸落として割れなければ合格。

④その塊に別質の白いサラサラの細かい砂をまぶし、指先で丹念に磨きあげて球にするが、この時少しでもザラツ

いた土が混ればこわれやすいので、先生には叱られるが芝生の樗の下の砂が最高だからそれを使うと失敗がないと強調した。そういえば十年前前にも本堂の縁の下の漆喰を削りとして困ったことがあった。

⑤固くなった塊に泥と砂の工程をくり返して層を重ねるが、その時、水でもよいがほんの少し唾液をふりかけてこすると、一段と固さが増し黄色のにぶい光沢も出る。

⑥ゆっくりと丁寧に固めたものを二三回落として強度を確かめながら、泥、砂をくり返すが、その時に少しでもヒビが入れば一からやり直す。

こうしてできた鉄マンは直射日光で乾かすとこわれやすいので、必ず陰干しにしなければならぬが、最盛期には数個の鉄マンを両手に抱えて探しまわり、あげくの果て、戸棚やピアノの下で乾かすので困ってしまう。

泥あそびは何と手間ひまのかかるものであろう。大人の土いじりもこれによく似たものだが、泥の文化(?)が日本文化の源としたならば、外国の子はどうなんだろう。土が失われていく日本の都会の子はなどと思いめぐらすにつけ、園庭の整備はどうしたものか迷うこの頃である。

(光明幼稚園)

# 土・どろんこ

高橋

季とし

愛たね



みんな「どろんこ」になっている。

保育園の子どもたちでした。小さな土の庭に、子どもたちは無心に、土と遊んでいる。

こうして、この子たちは毎日お天気の日とともに生きていく。

私はことし七十歳、生まれたのは山深い田舎なのです。

田舎者で、田舎育ちでした。その田舎育ちの私が自由結婚をしたので、親に反対され、田舎の土を離れ、都会の生活をしなければならなくなりました。

都会といっても、横浜市内の裏長屋の六畳一間の家でした。家賃は月額七円。

都会の味が、そこから始まりました。六畳一間が私の生活の城でした。大自然の「ふるさと」を離れた時、私は「ふるさと」の心のあたたか味がたまたまなく恋しくなりました。

田舎は「ふるさと」です。

田舎の「どろんこ」道は、下駄の歯がくっついて、とれないくらい強く「土」がくいついていました。

都会の道には、その心がなかった。味気ない道でした。その味気ない道を、私は、毎日毎日歩かなければ生きて行けなかったのです。

そうして、四十年間、都会に住んでしまったのです。それでも、都会人になりきれなかったのです。なぜか、私の心には、「ふるさとの土」が忘れられなかったのです。

都会の生活は美しく、キレイかも知れないが、都会とは、「物」と「物」との交わりしかないのです。物が無ければ暮してゆけないのです。

田舎の土には心がありました。

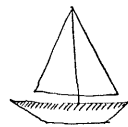
土の心を求めて、私は神奈川県厚木市七沢部落——ここは「丹沢・大田園定公園」のなかの六百坪の土地に、小さ

な「ふるさとの家」を建ててみました。それは、「ふるさと  
の土」が恋しいからです。土には心のいいいがあるから  
です。大自然の土を踏んでいると、草原に腰をおろしてい  
ると、空をながめていると、心が大きくなってきます。  
ここに自然の愛があると思っただのです。

鉢に咲く小さな花も、箱まきの野菜の葉の緑も、小さな  
土のなかからです。  
土はだまって、私たちの生命をたすけてくれています。  
土とは、どろんことは、  
ありがたいものですな。(月刊緑の新聞「土と愛」)

## おもしろかった粘土遊び

長 山 篤 子



子どもと生活を共にしていますと、子どもが引きつけら  
れるものに、私も自然に心が動いて参ります。特に面白そ  
うな表情をしていますと、「どうしてこんなに面白いんだ  
らう」と、心の中をのぞいてみたくなります。子どもはい  
ろいろなものを面白がります。この「面白がる」というこ  
とが、子どものあのエネルギーを燃えさせたせているのでし  
ょう。そして私も、あんなに「面白がる」という気持ちに  
なってみたいと思うのです。

子どもが「面白がる」場面を展開してくれる代表的なも  
のにドロンコ遊びがあります。砂場でのドロンコ、雨あが

りの庭でのドロンコ、そして粘土遊びもこの中に入って  
くと思います。

粘土遊びの場面を通してその様子を思い返してみたいと  
思います。

園庭の机の上に粘土の大きな固まり(子どもの頭大六個  
くらい)を用意しました。

- わあーやりたい。
- いれてー、わあーい。おおきいの、おおきいの。
- お水をかけて、べたべた、ぎゅー。のびた。
- うごいた、うごいた。

● 大きい、上からおとすわよ、べたん。(教師)

● わあーい、大きなおもちが落ちてきた。つくぞ、よいし

よ、わあ、このねんど力があるな！

● ばかー、おせ。おすのだ。

● 穴をあけますよ、横から水を入れて。

● おもしろいね！。(教師)

● おもしろいでしょ、おもしろいんだから。

● 両手でたいたいたり、なでたり、おしたり、ちぎったり、

身体全体で楽しんでるうちに、道路作りがはじまり、ト

ンネルが出来、山が出来て、大きな粘土のかたまりはいろ

いろと変化していききました。

● またある日、子どもと一緒に粘土をしていましたら、三

人の男児が代る代る言葉を交しながらこんな歌が出来てい

きました。

● 山がありました。

● 山に木がありました。

● きのがありました。

● ひろばもありました。

● くまが出てきました。

● ひろばをひろくしました。もっともっとひろくしました。

● くまはきのこをとりにきたのです。

● ボールがころがってきました。

● くまはボールをなげました。ひろばで遊びました。

● するとさいごに大雨ふりました。ジャー、ジャー、くま

はあわてて山ににげていきました。

● どんこねんどもおもしろい。

● ほんとに、ほんとに、おもしろい。

● そして最後に三人の男児は「あはは……」と顔を見合

せて笑い、また粘土に挑戦していくのです。

● 私もあー面白い、本当に面白いものだなーと粘土をひと

つかみすると、板に向ってなげつけてみるのです。

● 粘土遊びに熱中する子どもは、自分の心をたっぷりと表

現できているように思います。つくり出していく力が湧き

出ているように思います。

● 雨上りのドロンコで、日の暮れるのを忘れてカエルのエ

ルタごっこをしてきた娘、砂場のドロンコで、妹と二人で

体にドロをぬり合ってダムつくり熱中してきた息子の、

満足しきった表情をみると、ドロは、かくまでも子どもの

心を捕え、満足させてくれるものか何ともありがたい気

持ちになってきます。



しかし、こんな場面とは反対に、私の歩いてまわる保育園、幼稚園から、すっかり土粘土が無くなり、ろう粘土に変わってしまった現実を、土がセメントに変えられたあの冷たさと同じように、子どもは冷たさを肌で感じているのではないかと、残念に思っているこの頃です。一人一人の小さな箱に収められたろう粘土は、子どもの心の叫びに応えてくれるものなのでしょうか。「へび」「おだんご」を手の

## 泥



## 加藤徳弘

先で丸めて「おしまい」と時間をつぶしている姿の悲しさを、胸の痛む思いで見えてまわっています。「のびた」「うごいた」「力がある」「なげた」「べたべた」と失敗を気にすることなしに、ぶつかっていくことのできる土を子どもの前に、いつでも用意してあげたいものです。そして「あー面白かった」と私も子どもと一緒に溜息をつきたいものです。  
(弘前教会幼稚園)

私にとって泥というと、子どもの頃の泥んこ遊びはともかく、溝さらいのドロドロの泥を連想するのか、あまり良い響の言葉でない。やきもの作りを「火の芸術」とか「土の芸術」とか呼ぶことはあるが、「泥の芸術」という言葉はあまり耳にしない。やきものやでも九州など一部の地方で泥と呼ぶところがあるらしいが、我々には土のほうが自然に響く。

さて、やきもの作りに使う土にもいろいろあるが、作り

やすい、作りにくいということがまず問題になる。餅のようにただただ粘るだけでもだめ、海辺の砂のようにバラバラでも困る。餅には形を保つための腰がないし、砂に水を含ませても可塑性にとぼしく、また乾燥すると僅かの力でくずれてしまう。粘土の粒子を拡大してみると、他の鉱物と違って極めて薄い扁平状である。よく経験することだが、板ガラスを二枚重ねあわせて間に水を入れると、ツルツルと横の動きはスムーズだが、上下に斜がそうとしても少々の

力では無理である。粘土の可塑性はこうした扁平粒子の集まりでつくられている。従って細い（扁平）粒子が多くなればなるほど粘りの強い土になるわけである。しかし、粘りがあるからといって必ずしも扱いやすい土とはいえない。かえって適量の粗目の粒子や砂目（非可塑性物質）が混入していることが大切で、これが粘土の腰を強くして形をくずさない役目をする。この割合によって様々な性質の粘土になるわけだが、やきものは普通これを練り土にして使う。粘土の可塑性が最大になる水の量（可塑性水量もそれぞれに異なってくるのは当然である。つまり可塑性物質が多く、各粒子が細くなるほど沢山の水が必要になるわけである。作りやすいという点で理想的とされている粘土の可塑性水量は重量比で土の二五%前後といわれている。

冒頭に書いた泥という言葉の印象は、我々がこのような練り土（の状態）に親しんでいるせいでもあろうか。形を作るために必要な水は、やきもの作りには邪魔ものにもなる。乾燥・焼成という重要な工程で、水量の多い土ほど収縮が大きくなり、それだけ破損率が高くなるわけで、この点可塑性水量の少ない土が有利になるが、作りにくいという難問が伴うという具合に極めて厄介なものである。まして

や泥状からの乾燥は、よほど時間をかけて慎重にしても破損してしまふ。鑄込み成形という泥土を使った方法があるが、これは破損を防ぐだけの目的ではないが、水ガラス（珪酸ソーダ）を使って粘土の粒子間を離して水の量の少ない泥土にして型造りするというものである。泥をこうした狭い意味ではなく、いろいろの物質の集まりと考えれば、土も泥も同じものである。

土の可塑性とそれに対する水量といったことを書いてきたが、土の中に含まれている様々な物質はやきもの作りの上で思いもよらぬ効果や変化の原因になる。例えば、原土を乾燥粉砕して、水を加えて練り土にするが、普通これをすぐには使わず、適当な日数貯蔵しておく。土によっては何年間もねかしておく場合もある。ねかしにはいろいろの効用があるが、なかでも土中の有機物によって繁殖するカビが土の粘力を増大するという大きな役目をする。また天然に含まれた鉄分をはじめとする不純物は、高温と炎の状態によって様々な化学変化をおこし、科学だけでは割りきれない結果を生むといった具合である。

尾形光琳の弟乾山は陶器をよくし、仁清のあと京焼だけでなく、日本のやきものに大きな足跡を残しているが、そ

の『陶法伝書』に、土という土で焼物にならないものはないと書いている。たしかに形になればあの処理の仕方によってどんな土でも泥でもやきものに使えよう。ただ先記のことや、それぞれの土の耐火度等が重要な問題になる。

古代エジプトあたりで作られたあの美しい青や緑の陶器は珪酸分が多く、相当の高温で焼いたものであろうが焼きしまらずもろいものが多い。それに対してヨーロッパに多い石灰質の粘土は、撰氏九〇〇度程度で焼けるが、やはり軽いがもろい陶器である。日本の場合、撰氏一二〇〇〜一三〇〇度程度で焼成される長石質の粘土や、鉄分は多いが、やはりこの程度の温度ではほとんど完全に焼きしまる熔器粘土（例えば備前焼・丹波焼等）が多いのは実に有利である。このように各地各様の扱い方があるが、土の選択とその適切な処理をすれば乾山の言葉は決して大袈裟ではない。粘土を含水珪酸アルミナと呼ぶが、純粋な粘土は要するに石英とアルミナの混合物である。ところがこれでは耐火度が強すぎて単味では焼物用の粘土には不適當である。一部をガラス化させて焼締めるためには適量のアルカリ分を配合するか、天然にこれに加わった土を選ばねばならない。

先にもふれたように、幸にして日本列島には天然にこう

した陶土が豊富で、陶器王国といわれる最大の要素になっている。甚だ唐突だが、この天の恵みを利用しない手はあるまい。やきもの作りはまさに子どもの泥んこ遊びの延長かもしれない。創造意欲を満たすための素材として、土ほど身近にあって、しかも自由に造形の楽しめるものは少ない。しかも炎との結びつきによって創作欲は一層高められる。

私ごとだが、十年前日本陶芸倶楽部創設に参加したのも、まだまだ一般的でなかったやきもの作りの普及を真剣に考えたからである。今その夢は徐々に開花しつつある。しかしまだアメリカなどと比べると設備やアドバイザーの不足で大きくたちおくられているのは実に残念なことである。

日本陶芸倶楽部のある東郷神社の幼稚園では、卒園児にやきもの作りをさせてもう数年になる。年々面白い作品が並ぶ。大人の作品がそばで小さくなってみえるほど子ども創造力は自由で力強い。土は子どもをそれだけではなく、人の性質をストレートに伝えてくれる。土を通して多くの人々に接してきて、ものを表現するということが、器用、不器用ではなく、ただ無心に楽しむということができるといふことだとやっと最近感じはじめてきた。

（日本陶芸倶楽部）

## 保育の中の小さなこと大切なこと

④

守 永 英 子

幼稚園の子どもたちの、帰りぎわのひとつは忙しい。庭

や、保育室で、精一杯遊んだあとの遊具の片づけや、子ども

の身仕度——それもぬれたエプロンをはずしたり、汚れた靴

下の替えを出してあげたり、三歳児のクラスならば、コート

の袖を通したり、ボタンをかけたたりも手伝う。できないところ

は大人が手伝って、きちんと身仕度をして帰るようになる

ことが、子どもが自分で出来るようになったとき、きちんと

することへつながってくると思うからである。

「上手にボタンとめられたけど、一つずれちゃったわね」

と、とめなおしてあげたり、「B子ちゃん、お隣のC夫ちゃん

のえりを直してあげてね」と、子ども同士の手伝いを頼ん

だりしながら、子どもたちの身仕度を見とどけ、ひとりひと

りの表情の中に今日一日の生活を読みとりながら、「さよう

なら」のあいさつをかます。

三歳児クラスの三学期の、そのような帰りぎわのひとつと

き、いつものように、子どもたちの仕度を手伝いながら、ふ

とA子がスカーフを逆にかぶっているのに気づいた。対角線

に二つに折ったスカーフのかどが、前でひらひらしている。

「A子ちゃん、スカーフが反対になってるわ」と声をかけな

がら直そうとした時、「いいの」と強い調子の拒絶にあった。

「これでいいのよ」

私は、虚を突かれた感じであった。たしかに、小さい子ども

にも、自分なりのつもりがあって、「エプロンをとって上

着を着る」とか、「コートを着ないで持っていく」などの強

い主張に出会うことはしばしばある。そして、特に支障のな

いかぎり、子どもが自分の主張を通すことに、あまりこだわらないことにしている。子どもの方でも、コートのうら返しや、ボタンのかけ違いなど、誰がみても分かるような状況では、私が直してあげることに抵抗がなかったから、A子の拒絶は、思いがけないことであった。

私は、次つぎ、他の子どもたちの仕度を手伝いながら、「A子ちゃん、鏡でみてごらんなさい。とがった方が前にきているから反対だと思うけど……」と言ってみた。A子の気持ちを傷つけないように、さり気なく言ったつもりであったが、A子は「これでいいの」と言っただけで、鏡を見に行こうとはしなかった。かといって、そのままかぶって帰ったわけでもなかった。私が他の子どもたちの仕度を手伝っている間に、そつとスカーフをぬいで、ポケットにしまいこんだのである。

表面から見れば、これだけの、小さな出来事であった。しかし、妙に心に引っ掛かるものがあった。スカーフの前後を逆にかぶるなどは、さ細なことではないか……。私の心にかかったのは、この小さなことが一つにも、他を入れない彼女の世界の固さであった。もしA子が、がん固にそのまま帰

ったとしても、私はこれほど気にしなかったのではないかと  
思う。それは単に「受け入れない」という以上の、壁の厚さ  
であり、心と心の距離感であった。

A子は、その能力と固さから、一見、自立的に見える子どもである。しかし、自立とは他人の立場や意見に耳をとざして、頑固に自己の立場に固執するものではないであらう。周囲から多くのものをとり入れながら、これから成長していかなければならないA子にとって、他人の意見も、必要に応じてとり入れられる柔軟さが必要である。柔軟さを持ちながら、最終的には「自己の立場」で判断を下せる……そんな人に育ってほしいと思う。

四歳児のクラスでは、クラスの人数もふえ、先学期末に変りかけていた友人関係を、一そう変えてしまいかもしれない。その中で、彼女がどのように適応していくであろうか、見守っていかなければならない。

そして、私自身、彼女の世界にどこから近づき、ノックしたらよいのだろうか。もう一度、考え直してみなければなら  
ないと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 乳幼児の人格形成(一)

中沢 たえ子

わたくしは、今回、人間の人格を形成している一部分、しかも最も重要な部分である自我の問題について、つぎの四つの項目に分けて述べたいと思う。そして子どもとかわりあう日常生活の場面で、わたくしたちが幼児の自我に深い洞察を加えることによって、幼児全体をいかによりよく理解できるかを、読者の方々と一緒に考えたい。

- 一、自我の分離・独立
- 二、自我と攻撃性
- 三、自我と空想
- 四、自我と嫉

言うまでもなくわたくしがここでのべる自我とは、精神分析学的理論に立脚している。フロイドは人間の精神構造を、イドE・自我ego・上位自我superegoの三層に分け、それに加える幾つかの説をもって、神経症の解明や治療に役立てようとした。精神分析学、とくに自我の問題が、子どもの分野で本当に開花したの

は、フロイドの娘、アンナ・フロイド及びその仲間たちによるもので、乳幼児の心理的障害の予防、治療、また正常小児の人格発達の研究分野などで多くの業績を示し、児童相談やその親のガイダンスに非常に役立っている。ちなみに、精神分析的に用いられる自我とは、どのようなものであるか一応Heinz Hartmannの言葉を借りてのべよう。“自我とは、その機能によって区別されるべき人格中の一つの構成部分で、その重要な機能は、個人が現実と関係する部分の中心に座している。……自我機能とは、人間が現実接触に際して使うもので、そのためには生来与えられた運動的、知覚的機能、更には環境から得たさまざまな機能が与えられる。同時に自我は内外から加えられる刺激にむかって防御する働きを持っている”(自我の防御機能として異常心理学などで一般によくとりあげられる部分である)

## 一、自我の分離・独立

近年わが国では「三歳児健診」と称して、各地域の保健所を会場として満三歳になった幼児の身体的、精神的発達を検診することになってゐる。わたくしは、その集団検診に医師として参加しながらあることに気づいた。まだ三歳といえは大半の幼児たちが集団生活の経験がないため、大勢の母子が集まった会場の中で、それぞれが緊張と不安の面持である。不安は主役の子どもだけでなく、付添いの母親たちも同様に、あるいはわが子以上に感じているようで、その母親たちが子どもに言いよせている言葉が、わたくしの耳に入ってくる。「これをしないと幼稚園へ行かれないのよ」「幼稚園へ行くんだから泣かないのよ」……。実際には、三歳児健診と幼稚園入園とは何の関係もないのだが、沢山の母親が会場で、無意識に口から出す言葉が「幼稚園へ行く」ということであるのは非常に興味深い。緊張した心の中から、ついわが子に「幼稚園へ行くのだから……」と言いきかせる母親の心理をわたくしは考えてみた。それは、出生以来、これまで物理的にも心理的にも母親から一人で離れたことのない我が子が、いよいよ家外で、母親以外の他人との関係を持つ時期が来た、つまりは自分の単なる分身ではなくなってきた、ということ、母親たちは漠然とながらも感じ、それが「幼稚園へ行く」という言葉で表現されるのではなからうか。

昔、このようにわが子の独立の第一歩を感じる母親の意識は、子どもの小学校入学の頃ではなかったらうか。しかし、戦後、しだいに幼児教育が充実するにしたがい、幼稚園入園の時期となり、更には三歳児健診の、いや、最近はずっと幼い時期までに早まって来つつある。このような早期移行現象は、社会心理学と個人心理学の接点の分野で、それなりにわれわれに多くのことを考えさせる。しかしこの問題は他の機会に譲り、今回の主題、母親がわが子の心の独立の時期到来を感じるとき、幼児本人の心の独立、つまりは、幼児の人格の中で、自分自身で現実と接触するために使う自我の独立は、どのようにして起こり、成長しているのであろうか、またそれが健全に成長しないとき、どのような問題として認められるのか、について考えたい。

普通、生後一、二か月頃の赤ん坊は、眠り、飲み、排泄し、というように、ただ生理的現象に支配された一日を過ごしている。赤ん坊は乳を与えられ、乾いたおむつを当てられ、満足すれば安らかに眠るが、空腹や、濡れたおむつや、あるいは何かの生理的不快感、例えば腸内のガスや、体の病氣などがあれば、泣いて母親の注意を引く。こんな時、母親は、可能な限り赤ん坊の不快感を取り除くために心を配る。優しい声、柔らかい母親の肌、温かい

乳などが赤ん坊の心を鎮め、自己愛的な平和な眠りにさせようとする。こんな一見何げない母子間の繰り返しを、ハートマン Hartmann は「溺愛と剝脱の原則 Deprivation and Indulgence principle」と名付けた。彼によれば、乳児が不快や空腹で泣くとき乳脳を体験し、母親の世話で満足するとき溺愛を体験する。この原則を一日のうち何度となく繰り返し体験しながら、乳児は自身自身の体内にしたいに育ってくる視覚、聴覚、その他の感覚機能、更には記憶力などを使って、不快に泣きながら母親の到来を空想し、空想通りに現われる現実の母親を外界に存在する特定の対象として認識し、更には愛するようになる。つまり、乳児が外界、その代表者である母親を認識するためには、「溺愛と剝脱の原則」が必要条件であり、溺愛か剝脱かの何れかにあまり強く偏りすぎたとき、正しい母親認識、即ち健康な、愛情をもった母子関係の基礎に問題が起り易い。以上がハートマンの説であるが、彼はこのように述べながら、更に人格の中核、あるいは基礎とも言うべき自己認識（自己と外界の区別の認識）が、乳児初期からの母子関係に重大に基礎を置いていることを示唆している。

「溺愛と剝脱の原則」を通して育つ母子関係は、乳児の笑顔の成長を見てもよくわかる。生後一、二か月の乳児は、とくに何を見てということもなく笑うことがある。昔の人は「仏様が笑

わせている」と言ったそうだが、そのうちにたしかに人間だけを  
見て笑うようになる。三、四か月頃の乳児である。余談になる  
が、小児科医としてこれから予防注射をしようと針を持っている  
私に、この月齢の赤ん坊は笑いかけて来る。私は思わず「ごめん  
なさい」と一言いってしまう。これが九か月頃の乳児になるとも  
うそうはいかない。早い乳児で六か月頃から、遅くとも十か月頃  
までの間に、乳児は養育に当たってくれる母親、及び日常顔を会  
わせる家人と他人とを確実に区別しはじめる。見なれない人には  
もう笑顔は見せず、まじまじとその人の顔を見、近寄られると、  
泣き顔になって母親の腕に顔を隠す。こうなると、機嫌の悪い  
時、病気の時などは、母親以外に乳児を慰めることはできない。  
人見知りする頃の乳児は母親が要求充足と満足をもたらす外界の  
特定のものであることを認識し、ひたすら母親に依存する。また  
母親もわが子のそのような心を感じ、子どもと心理的に一体とな  
ってその心は何時とも子どもの方を向いている。このような状態を  
マーガレット・マラー Margarette Malar は「共生的関係」と  
表現し、「この時代にまだ現実対処のしかたを知らない、非常に  
未成熟な自我しか具わっていない子どもは、母親の成熟した自我  
を借りて現実に対面している」と説明している。

安定した心の母親に育てられた乳児は、母親に依存し、愛する



ことを知ることによって、将来人間として生きるのに必要な自我の基礎を持った、と言えよう。高度の性格障害者、自閉的情緒障害児などが、この時代に親の責任か、あるいは子どもの側の問題かで、生き生きとした母子の依存関係を経験していないことは、児童相談の場でよく知ることである。また、スピッツ Spitz の施設 *Hospitalismus* の研究では、性格障害のみではなく言語、知能の発達にも障害が認められることを実証している。またこの時代に一度愛した母親を失った幼児は悲惨である。ポウルビー Bowlby の「二歳の女の児の入院」の研究が、そのことをわれわれに如実に知らせたのであるが、私も同じような話を、三歳児健診の会場で、数回聞いているので、その一つをここに紹介する。

ヘルニヤの手術で一歳十か月頃、完全看護の病院に六日間入院させたが本当に可哀そうな目に会わせた。入院中散々泣いていたらしく、顔も変ったようにやせて退院して来た。せっかくおむつもとれかけていたのに全然教えなくなってしまう、ぼんやりした感じで母親の後も追わない。ところが二日目頃からは、母親にしがみついて片時も離れず、ちょっと姿が見えなくても泣きわめき、その頃は母子共に一緒に泣いていた。一か月もすぎた頃からまた普通に遊べるようになったけれど……。

子どもの心理について知識の少ない母親は、病院でひどい待遇

を受けたかのように述べているが、事實は誤解であり、その年齢が当然もたらす反応と考えてもよいとわたくしは考える。そのために、最近では、小児病棟を担当する医師や看護婦たちの間に、小児の入院に際して、乳幼児の心理的外傷を最小に食い止めるべき工夫が論じられるようになりつつある。

入院のような場合は再び母親との関係が回復できるが、死別、その他長期間の別れ、また、たとえ一緒に住んでいても、母親の心が幼児から離れるようなことがあったときなどに、深刻な人格形成の問題を起こした例が多い。

さて、十分に共生的母親関係を経験した幼児は二歳前後から、次第にもう母親の懐の中に甘んじなくなってくる。運動機能、言語などの発達に伴い、「これ何？」とつぎつぎに外界に関心を向け、また自分でやることを強調しはじめる。ときには強情なまでに自分でやりたがって母親と衝突する。まさに子ども自身が、自分で現実接触を始めるのである。すなわち、自我の分離・独立の開始と言えよう。このように人間の自我の芽生えは、出生してこの方育てられた共生自我、及び子ども自身の生物学的成長、双方の中から一体となって出現するものと思われる。したがって、話は少しそれるが、たとえば知恵遅れの子どもや、体に高度のハンディ

キャップを持つ子どもの自我の独立が正常児よりも遅れるのは当然と言えよう。それゆえに一そうこれらの子どもたちの養育、教育を担うものは、自我の健康な育成に留意しなければならぬ。

さて、自我の分離、独立の時代（マラーによれば二歳から三歳頃の間）に、決して幼児は自分一人でそれを遂行するのではない。「ママ見て！見て！」と自分の成果を母親に見てもらいたがり、「お利口さん」とほめられると喜んでもう一度挑戦してみようとする。同時に、何事も総て自分の欲求通りに物事がかなうような乳児時代の空想、そしてかなわなければ泣くか、母親の胸の中に逃げ込むような弱いフラストレーション・トレランス、それらももう通用しなくなったことを知り、我慢や、他人にゆずることができるようになる。もちろん、そうすれば「ママがほめてくれるから」、またはそうしなければ「ママに叱られるから」である。

この時代の幼児は、母親の愛情・承認と、自分の幼稚な欲求との二者選択に直面し、確立した母子関係を持っている子どもは迷わずに前者を選ぶことができる。そうして自我の分離・独立を始めた子どもは、はっきりと自分と他人の区別を認識し、対等な人間関係を同年配の子どもたちと営めるようになるわけである。

子どもが健康な自我発達をするためには、日々、母親の自我に

支えられ、またその健康の度合に非常に影響されていることが、これ迄におわかり頂けたことと思う。理想的に言えば、子どもの依存、甘えを敏感に感じて支持を与えると共に、子どもの成長へのエネルギーを適切にとらえ、その成長を許し、援助することができる母親であれば、その子どもは、安心してながら、日々自我の分離・独立のために生活することができる。大抵の母親は、自分がそんな役割を果たしているなどということを意識せずに、わが子の育児に日々明け暮れている。そして、たとえば「三歳児健診」の会場で子どもと共に不安を感じて、オロオロしたり、会場から逃げ出すような退行現象ではなくて、「幼稚園へ行くのよ」と子どもに言いきかせて、より成長への道を母子共に歩もうるのである。

三歳児健診で検診をこわがって泣く子を見ても、わたくしはその子の自我発達の問題などとは考えない。しかし、四歳を過ぎて幼稚園の生活の中で、母親から離れられなかったり、集団活動は参加できず、それが、何時までも続くような子どもの場合は、そろそろ、自我の独立という問題を心配する必要がある。つぎに既に十六歳にもなった男子の例を挙げる。

K男は現在十六歳、本来ならば高校二年になるところだが、今春、やっと中学三年を卒業した。小学校六年の途中から本格的な

登校拒否症を起こし、約四年間、家に閉じこもった末、やっと半年程、地区の情緒障害児対象の学級へ通って中学を卒業したわけである。K男の学校嫌いは、既に幼稚園時代からで、一人で逃げ帰ったり、嫌がったり、一年の三分の一も登園していなかったという。また園では現代流に言えば何時も、「白けて」居り、同年配の子どもの仲間に入らなかつた。知能的には問題はなく、むしろ大人びた生意気な事を言い、両親や、祖母は将来を楽しみにしていたようである。小学校低学年時代も同じような様子で、母親の心配はその点で続いていた。わたくしは彼が十四歳の頃、はじめに会ったが、一対一では生意気なことを言うのに、実際には同年配の男生徒、男の大人が恐ろしく、学校どころか外出も落着いてできず、また、母親に対しては激しい憎悪と怒りを、同時に二歳年下の妹に、不合理な迄の嫉妬を抱き、家庭では些細なことに怒り狂う有様であった。その後二年間、いろいろの人たちが彼を心理的に助け、その結果、彼はやっと情緒障害児学級へ通い、高校進学を現実的に考えられるまでに至った。この時点で彼を根気よく導いた障害児学級の中学教師が、全く驚いたようにのべていられることが興味深い。

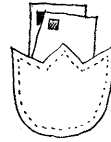
「親たちが世話を焼きすぎることにはびつくりしましたね、彼が母親を拒否することをあまりやらなくなつて、高校受験すると言

い出してからは、母親は彼が毎日どのくらい勉強するか気になつて気になつて、トイレの中に、覚えられるようにして英語の単語を書いてはつたんですよ。高校の願書を出すことも親がやってみようし、一人ではさせられないんですね。それに彼も親にそうしてもらいたがっているんです。今迄あんなに大人ぶつて生意気な態度や言葉を使っていたのに、この頃は、パパ、ママって親のことを私の前でも言うんですよ。全くの甘えが顔を出して来たって感して、結局、幼稚園時代、親から離れられなかつた気持ちから全然成長していなかつたんですね。」

現在、小、中学校で心理的問題の第一位を占める登校拒否の心理的本質は、「分離不安」であるところリッジ Koedje はのべているが、この場合の分離とは、親からの距離的な分離ではなくて、自我の分離を意味するものであることがおわかり戴けよう。人間は幼い頃、母親関係が理由で心理的成長が順調にはかどらないような時代を過ごす、その後、身体や知能はたとえ成長しても、無意識的にその時代に心は固着して、その人の性格形成は、まるで固まっていない土台に家を建てているようなものである。幼児の教育に携わるとき、われわれは彼等の自我の健康な分離・独立をその母親と共に見守り、また援助したいものである。

(中沢小児クリニック)

## 「日本幼児保育史」研究余滴（五）



岡 田 正 章

日本の幼児保育史ということばは、刊行された六巻の書物の書名としてよりも、何かしら、そのために汗水流して苦労したものの、また、当時お互いに若かった村山貞雄、水野浩志、津守真、安戸健夫の四氏、また、赤池溥子さん、豊田玲子さんたちと、まだ木造校舎のあまりきれいでなかったお茶の水女子大学の津守先生の研究室で、大学図書館から借り出した文献を、カメラに接写装置をつけてコピーをとったり、筆写したりしたことがついてまわるものとして耳に響く。しかし、今ではよい協同研究をさせていただけたとなつかしく思われる。

文献として、明治二十九年に結成されたフレールベル会（大正七年、日本幼稚園協会と改称今日に至っている）が、明治三十四年

に創刊した保育の専門月刊雑誌「婦人と子ども」（現在本誌「幼児の教育」として、実に七十五年の長きにわたって刊行し続けられている）を、第一巻第一号から明治・大正・昭和のすべてにわたって眼を通すことができた。所蔵はお茶の水女子大学の付属幼稚園と付属図書館とに、各一揃いあった。非常に貴重な文献であり、わが国の保育史を研究するひとにとっては、必見の文献の一つといえよう。

研究期間中は、どこに旅行しても、何か史料になるものはないかと眼をみはっていたことも思い出される。たまたま、宝仙学園短期大学の保育科学生をつれて、大阪・京都の幼稚園・保育所を見学旅行したときのことである。大阪教育大学付属幼稚園を訪ね、園長室で園長先生と懇談しながら、園長室のなかにある書棚に眼を向けていると、黒い背のかなり厚手の本が三冊所蔵されて

いる。何だろうかと園長先生にたずねたら、古くからおいてある本ですよとの答え。一寸拝見させて下さいと手にとってみると、何と、かねてから是非調べてみたいと探していた「京阪神保育会雑誌」を製本して三冊にしたものであった。驚きとともに、絶句にも近い喜びであった。早速お願いして、拝借し、東京にも帰り内容を調べて、これを保育史の素材とすることができた。この雑誌は、大阪の愛珠幼稚園（わが国における明治時代の保育教材を所蔵した宝庫ともいえる貴重な存在）にも、一部所蔵されているが、第一号から第六号など一部が欠けている。京都・大阪・神戸の三市の幼稚園関係者が、保育の充実・幼稚園の振興を願って京阪神三市連合保育会を結成したのは、明治三十年である。翌三十一年から年二回の割合で連合会雑誌を刊行したのである。この雑誌のなかには、連合会総会に招かれて講演した倉橋惣三や和田実などの講演速記が収録されている。「幼児の教育」誌とともに、保育史研究には貴重な資料といえよう。

文献の探索では、そのほか東京の古本屋歩きをしたこともなつかしい。このとき、僅かしか出版されなかった「日本基督教幼稚園史」を発見したときには、思わず小躍りして狂喜したことが思い出される。この本は、昭和十六年、「基督教主義の幼稚園が我が国に渡来五十年を祝ふ記念事業の一つとして」編纂されたもので

ある。まもなく、太平洋戦争が勃発し、やがて本土、特に幼稚園が多く設立されている都市地区は、アメリカ軍の飛行機による爆撃を受けた。ほとんどの市街地区は焼土と化し、このため、昭和二十年八月十五日以前に刊行された書物の多くは消失してしまっている。明治・大正・昭和前半期の文献を調べることは、非常に困難な場合が多い。「日本基督教幼稚園史」もその一つである。

そのほか、東京都立大学の近くにある古本屋佐野書房の店主佐野さんと平素から親交していた。その佐野さんが、店によったとき「珍しい本が入っているので、先生にとっておきましたよ」といって赤茶けた雑誌を三十冊位たばにしたものを出して下さった。ひもをほどこいて調べると、「社会事業」「幼児の教育」「児童保護」などの雑誌で、しかもそのすべての雑誌には、生江孝之の論文が掲載されている。さらに驚いたことは、雑誌のほかに一冊和綴じの本らしきものがあるので開いてみると、生江孝之自身が書いたと思われる「米騒動」についての論文が和紙に筆で書かれているものであった。昭和十三年に刊行されている「生江孝之君古稀記念」という書物の六五五頁「著作目録」に、「米騒動」に関する卑見——大正七年九月「原稿」と記されている。とすれば、私が入手したこの和綴じのものは、生江が書き記した原稿そのものようでもある。生江という朱印も押してある。かねてか

ら、生江孝之を、わが国における社会事業の開拓者をして保育事業の先覚者として位置づけようと思つていただけに、こうした文献の入手は、まことに胸躍るものであった。

また、ある日、宝仙学園短期大学で授業をすませて教授室に戻ってきたら、同短大の清水俊夫先生が、「先生、こんな古本が入ってできましたが」と手渡された。書名が「幼稚園保育」ということだけは明らかであるが、著者、出版年、出版所は何も記されていない和綴りの三十九葉の書物である。いままで保育関係の和綴りの書物としては、近藤真琴の「子育ての巻」（明治八年刊）、関信三の「幼稚園法二十遊嬉」（明治十二年刊）、飯島半十郎の「幼稚園初歩」（明治十八年刊）と、翻訳書としての「幼稚園」「幼稚園記」（いずれも明治九年刊）程度のもので知られてきた。倉橋惣三の「日本幼稚園史」のなかに記されている「保育文獻」の項にも、「幼稚園保育」という書物名は見当らない。

一気にこの本を読んでいくなかで、いくつかのことに気がついた。まず第一に、「幼稚園」という訳書の原本が「英国のロンジと云ふ人の著はせしものにてイングルスキンデルガルトネルと題せるは英文の書文部省にて翻訳出版せるものなり」とある。倉橋

の前掲書には、「英国ロンゲ氏著せる英国幼稚園と題する英文の書」とは記してあつても、「英国幼稚園」の原名が何であるかは知られていなかった。実は、このことの発見が、後述する国会図書館での新たな発見の導火線となつてくれることになった。

第二に、十八頁の「第四十七節読み方」の文中で、次のような叙述に出合った。当時の文字指導についても一瞥することもできると思われるので、やや長いが引用しておきたい。

「読み方は初に片仮字、平仮字を以て幼児の知り得たる物の名等の綴り方の易きものを黒板に書き示して仮字の称へ方用い方を教へ後には仮字を記せる骨牌を以て物の名等を綴らしむ

附言 読み方は幼稚園には必用にはあらず全く之を省くも少くも差支へなし 然るに之を教ふる所以のものは父兄たる者幼児の教育を急ぎ幼稚園にて只玩具を以て遊ぶのみを見て満足せず 幼稚園の帰りに私塾に遣り読書習字の業に就かしむる者多し 抑幼稚園の保育課は皆遊嬉に属し大人より見れば実に平易なるへけれども幼児に取りては相應の疲労を覚ふへし 然るに読書習字の如き興味のなきものを疲労せる後に課せらるるときは幼児の困難幾くそや 教育上亦決して喜ぶべきことに非らず されはとて世の父兄の企望に全く背馳するも得策に非ず

且我邦の文字に至つては平易にして教ふにも学ふにも困難な  
ければ之を稍や年長の幼児に教ふることなきは一には父兄の  
望みに適ひて幼児を強ひて私塾に遣るの弊を減し 二には後日  
小学に入るに及て幼稚園と大なる差異を感ぜざる便あらんかと  
の心得より 幼稚園の上の組には仮字にて読むこと書くことを  
教へ小学校にては幼稚園の紙摺み紙折り縫取り等を加へらるる  
こととなりたるならん 然る後私塾に遣るの弊は大に減したる  
か如し 然るに昨年二月文部省より学齡未滿の幼児を学齡兒童  
と共に教育するは衛生上其害少からざるにより幼稚園の保育法  
によりて保育すへしと達せられしかは地方にては其前まで学齡  
以下の幼児を勧めて入学せしめたることなれば其達しにより急  
に差支へあれとも幼稚園の保育法に熟せず 止むを得ず只学齡  
兒童と教場を異にし読み方書き方教へ方等を課せんと試る者頗  
りに是あり故に次に読み書きを教ふことの早きに過くへから  
ざるの理を述べ参考以供す」(以下略)

この文中の「昨年二月文部省より」という叙述によつて、この  
書物の原稿が書かれたのは、間違いなく明治十八年であることが  
知られた。何故なら、ここにいう文部省の通達は明治十七年二月  
に全国に出されているからである。このようにして、一つの書物

の出版年を見当づけることができ、その内容がやはりフレーザー  
の恩物中心であることの時代性も知ることができた。しかし、依  
然として著者が誰であるかは不明のままである。「日本幼児保育  
史」第一巻の一三八頁に「明治十八年出版されたと思われる幼  
園保育」と記してあったり、一四〇頁の注八に「筆者不明・幼  
園保育」と記してあるのは、そうした事情による。この書物は、  
宝仙学園短期大学図書館に所蔵されている。

資料探索の上で、生涯忘れることのない感動の場面として、国  
会図書館のできごとがある。共同研究の始まった昭和三十一年  
ごろには、現在東京・三宅坂に所在する国会図書館は、東京・上  
野の国立博物館の近くに、古い建物として建っていた。そのうち  
に、現在の場所に新装なって移転した。保育史研究は国会図書館  
の移転にもおつきあひしながら進んでいたということになる。

新装なった三宅坂の国会図書館にも足繁く通った。書庫から五  
冊位ずつ図書館員が出してくれるのを待っていたのでは、沢山の  
文献に眼を通そうとする場合には、時間のロスが大きすぎる。そ  
こで、大学の図書館長から、特別閲覧便宜方の要請書を出しても  
らい、自分自身書庫に入って、書庫のなかで、必要な文献を出し



てきては、必要などころを書き写した。たまたま、明治末ないし大正の始めのころわが国の保育界にモンテッソーリ法が流入してきたことの事情を調べておこうと、書庫のなかの雑誌「心理学研究」のバックナンバーを読んでみた。その中途、休憩のつもりで書庫のなかを何気なく散策していた。すると、普通、背表紙が分るようたてて書棚に入っているはずなのに、八十冊ばかりの本が、ほこりにまみれて、ひもにしばられたまま横になって、書棚の一番下におかれているのが眼に入った。何気なくひっぱり出して、ひもをといて手にしてみると、すべてが洋書である。

みてゐるうちに、Donai, A., Kindergarten: manual for the instruction of Frobel's system of primary education, 1872 という書名の本があるではないか。これこそ、まさに、明治九年関信三が訳した「幼稚園記」の原本ではないか、全くの驚きである。やっぎ早に、その書名をみていくうちに、そのほとんどすべてが幼稚園、幼児教育に関するものであることがわかった。しかも、その本には、「明治十年三月文部省交付」という印がおしてあり、「教育博物館印」という公印が大きく押されている。このころ、誰かが外国から持ち帰ったものと思われる。明治九年ごろ翻訳されたときの原本がこれであったかもわからないぞと思ったりした。

そのうえ、明治九年に訳書となって刊行された「幼稚園」の原本ともいうべきロンジ夫妻の英語本が、次のようなものとして発見できた。

Johann and Bertha Ronge, A Practical Guide to the English Kindergarten (children's garden), for the Use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers. 1877

かつ、この英語書をよんでいると、その序文(Introduction)の文章が、どこかで読んだものとそっくりである。それは、訳書「幼稚園」の第一巻の冒頭にある「総論」の文章であった。しかし、倉橋物三はその著「日本幼稚園史」のなかで、次のように記している。「上巻の総論の部は、訳者桑田氏の幼児教育についての意見であって、学齢以下の幼児を指導するには、恩物を用ひるのが最もよい方法であるから、その任に当る者が大いに心すべきであるとの意である。総論は訳文ではなく、全く桑田氏の意図から出たもので、当時に於てかうした訳書をなす程の識者として、氏独得の意見があらはれてゐる」(同書三五七頁)

原書と訳書とを照らし合わせてみると、訳書の総論部分は、原書の Introduction 部分であって、明らかに訳文である。したがって「日本幼稚園史」のなかでの倉橋の指摘は、事実と異なる、誤まった把握ということになる。こうしたことの見ても、この幼児



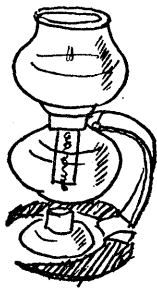
保育史共同研究のなかで、国会図書館の書庫に入っている、偶然のチャンスでのがらに属すものであった。

以上、今回の共同研究の過程で、文献の面でさまざまのよい経験をしたことを中心に思い出を記した。そのほか、いろいろな方と出会えたことも、なつかしい思い出となっている。そのなかには、すでに故人となった方もおられる。そのお一人、群馬県高崎市所在の日の丸幼稚園々長山端息耕先生を同園にお訪ねしたのは、昭和三十六年だったと思う。明治三十六年に、同地に私立樹徳子守学校を開設されて以来、地域の子女のために努力を重ねられた。昭和十六年保育施設「日の丸保育園」を開設、戦後昭和三十年に幼稚園に転換。こうしたことの経緯をうかがい、仏教主義の立場での子女教育・保育の姿を覚えていただけた。しかし、いまは故人となられた。そのご令息・現園長山端敬吾先生から、昨年一月封書をいただいた。開封してみると、昭和十一年七月一日撮影の「高崎・樹徳学校写真——文部省の命により、スイス国チューリッヒ市ベスタロッツ記念館へ寄贈した写真板より複製したもの」四葉が入っていた。ご尊父からいろいろお話を聞いていた私のことを思い出され、新たに入手されたこととして十数年を経

た今日、お送り下さった芳情がありがたかった。

そのほか、多くの方々から親切を受けたことがなつかしく思い出される。ただ、京都市の、明治のころ幼稚園に入ったという老人をたずねたとき、その思い出話が、青年期の恋愛などのことを夢中で話され、幼稚園のことは最後になって、「すっかり忘れたよ」との結末になったりしたこともあって、こうした古老との話のむつかしさを感じたことも思い出の一つである。歴史研究は、第一資料を掘り出そうとすれば、時間と労力が莫大にかかるものである。しかも、まだまだ十分なものとはならない。いまでも、地方に出かけると、あの頃の癖がぬけないで、資料掘り出しにかかったりしている。

(明星大学・宝仙学園短期大学)



「それぞれの子どもらしさを求めて」より (九)

名古屋市立大高幼稚園



ぼくクラスの世話係だよ

砂場の近くで、ひろゆきを中心に�て男児のグループが、「だるまさんがころんだ」とか「あぶくたつた」「宝とり」などを�て遊んでいた。みんなが遊んでいる中でひとりよしのりは、かわつた参加のしかたをしているのが目についた。よしのりは仲間に加わっているのではない。宝とりゲームのときグループをふたつにわけけるために、じゃんけんをしていると、そばでみていて勝ち負けの判定をしたり、どっちに行くか迷っている子どもがいると、うしろから押してやったり、いろいろと世話をしていた。友だちの紙ひこう機が木にひっかかったのをみて、

「どっつ」

といいにくる。

「よしのりくんのか？」

ときくと、

「ちがうよ、ひろゆきちゃんの」

というよな調子で、いつも、男児のグループの世話係をして楽しんでる。

◇ ◇ ◇

よしのりは遊びの中に入らず、外から友だちの世話をするこゝにより、自分もグループの一員であるという喜びがあるように思う。またいつかは自分も遊びの中へ入ろうと思つているのではないだろうか。しかし、友だちのこゝになると、教師にこたわりなくかわつてくる。よしのりのある一面が、うきぼりにされたひとこゝまであった。教師は子どもを多面的にみられるように努力しなければならぬ。多面的にみられるよなになると、教師のその子どもへの接し方もかわつていかなければならぬ。

(五歳児 十一月十六日)

ぜったい ぼくやるよ

きょうは十一月の誕生会である。

昨日誕生児の子どもたちに、

「先生も何かしてあげたいと思うけど、

どんなことがいいかしら？」

ときいてみた。みつ子が、

「人形劇がいい。」

という。子どもたちは人形劇の何をしてほ

しいか、いろいろ題をいう。その中に三匹

の小豚があつたので、

「三匹の小豚、おもしろいからいいね、

でも先生ひとりではできないわ」

というと、子どもたちから、

「やる、やる」という声があがった。

「じゃ、先生おおかみやるから誰か小豚

さんしてくれる？」

というと、ほとんどの子どもが

「やる、やる」と手をあげた。誰にして

もらおうかと困ってしまった。せっかく、

みんながやりたいという気持ちをもって手  
をあげているので、どうしてきめようかと  
思ったが、じゅんたが、

「ぜったいやる。よく話知つとるから」

と力を入れていうので、

「じゃ、じゅんたちちゃんやってね」

といわざるをえなくなつてしまった。結局

しんときみのふたりにもやつてもらうこと

にした。きょう、じゅんたが登壇してくる

のに廊下であつたとき、

「ウーウオッホン」とへんな声を出し、

「のどは大丈夫かな」

といつて通りすぎた。一瞬なんのことかと

思ったが、はつと思ひあたり、

「大きな声だせるかしら」

というと、

「ウワーッ」

と大きな声を出す。

「よかったね」

といったのだが、きょうの人形劇に対する

きみは、

じゅんたの気がまえが感じられた。教師が  
舞台や人形の準備をしている頃、じゅんた  
は園庭で遊んでいた。

きみは、

「練習しないといかんもん」

といつて人形をもち、きみとゆかと練習を

始めた。三匹の小豚のストーリーは、みん

ながよく知っている。特に昨日から自分が

するといふことのきままっているきみはスト

ーリー通りに進めていこうとするのだが、

ゆかはストーリーにあまりこだわらない。

「うちを作るう」

といふことになったとき、それぞれが、わ

らの家、木の家というのだが、ちい豚にな

つたはずのゆかが、

「わたしも木の家」

という。みている子どもから、

「ちがうよ、レンガの家だよ」といわれ

ていた。教師がおおかみになって、その中

に加わりつぎに家をこわして、最後の

レンガの家になった時、ちい豚の家の中の  
ようすを表現するところで、きみが

「スープをになぎやいけないわ」

といっているのに、ゆかは、

「お風呂に入りましょう。ジャブジャブ」

などといっており、自分の遊びとして楽し  
んでいる。あまりストーリーにこだわら  
ず、ゆかのような子どもらしい話のすめ  
方で三匹の小豚ができたら楽しいと思っ  
た。誕生会をはじめの時刻になって、じゅ  
んたやしんが保育室にはいつてきた。この  
ふたりができなかったら、ゆか・きみにし  
てもらってもいいと思っていたのだが、

「ぼくやるよ」

といって、はりきってやる気じゅうぶんで  
あった。結局、じゅんた・しんのふたりは  
ぶっつけ本番でやることになったのだが、

「これから、三匹の小豚をやります」

など、しんはなかなかしっかりやってくれ  
た。教師・じゅんた・きみ・しんの四人で

無事演じ終った。演じている子どもたちも

リラックスマードであり、みている子ども  
たちもほんとに楽しそうで、いっしょうけ  
んめいにみてくれた。終ったらゆかが、

「ああ、おもしろかった」

といっていた。しんに

「じょうずにできたね」

とほめたら、

「そりゃそうさ、夜までずっと本よんど

ったんだもん」

と当然でしようという顔で返事をした。

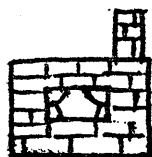
◇ ◇ ◇

朝のじゅんたのようす、きみの練習とい  
い三人の子どもたちはやるということ、

昨日からそれぞれが努力してきたのだ  
なと思った。

この意欲と努力に教師は心の中で最敬礼  
をし、子どもの成長の姿として心にかぎと  
めたことである。

(五歳児 十一月二十七日)



香水もつけましょう。パッパッ

きのうのつづきで、美容院が開店した。

「先生、もうパーマ屋さんは、はじまっていますよ。ねえ早くきて」

とみさ子がよびにきた。その時手が離せなかつたので、

「あす、行きます」

という、

「早くきて、もうだれもこないんだからとせきたてる。本屋さんごっこに区切りをつけてお客にいった。」

「ごへすわってください」

「先生、何をやりますか」

ときのう作った「ばーま」「せつと」

「かっ」とかいた紙をみせてくれた。

「セットおねがいます」

と注文する。

「かっちゃん、先生、セットだつて、ち

よつと油とつて」

かずみは紙で型どつたびんをみさ子にわたす。

「チューチュー」

とチューブから油を出し、髪になすりつけるしぐさをする。そして、くしでといたり、ピンでとめたりしてくれた。きのうは、みさ子ひとりできていたが、きょうは、かずみ、とし子たちもそれぞれお客を相手に活動していた。

「先生のうしろのかみ、ピンとはねるようにしましょう」

「あつ、香水もつけましょう。パッパッ」

と、いって香水びんを振るまねをする。

「はい、鏡をみてください」

「あら、すてきな頭になったわ、どうもありがとうございます。おいくらですか？」

「千円でです」

教師の頭は、何とも無残なものであった。

三回目に入ったときは、ハンカチをきちん

とたたみ、パフにみたてて、

「おしろいで、お化粧もしますよ」

と顔をパタパタはたいてくれた。少しずついろいろな美容のしぐさが増えられ、現実に近い遊びになっていった。しばらくして美容院をみると、だれもない。

「きょうは、パーマ屋さんお休みですか？」

「お休みなの、わたしたちここが家で、

あそこへ働きに行つてるの」



子どもの遊んでいた場があいていると、教師は、もうその場の遊びは終ってしまったと思ひ込んでしまう。ままごとに自分の安定する場をおき、他の場で活動をし、また帰つてくるといった、このような動きをたいせつにしてやるのが、遊びを継続させ、内容を豊かにすることだと思ふ。

(五歳児 十二月八日)

「幼児の自然認識と教育」の研究（一）

出席者

津 守 真

（お茶の水女子大学）

山 柝 雅 信

（関東学院大学）

太 田 次 郎

（お茶の水女子大学）

熊 倉 功 二

（大和学園短期大学）

本 田 和 子

（お茶の水女子大学）

浅 見 千 鶴 子

（お茶の水女子大学）

堀 合 文 子

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

これは特定研究「科学教育」の打ち合わせ座談会です。追って研究報告を掲載する予定です。

津守 このたび、「幼児の自然認識と教育」というテーマで、幼児教育に関心を持ついろいろな専門の方々に集まっていただけで、共同研究を行うことになりました。自然科学の分野からは、工学・流体力学の山根雅信先生、生物学の太田次郎先生、物理学の柳瀬睦男先生と熊倉功二先生、深層心理学・文化の立場から秋山達子先生、児童文化と保育の立場から本田和子先生、発達心理学の立場から浅見千鶴子先生、実践保育の立場から堀合文子先生です。今日は秋山達子先生は海外にいられてご欠席です。それから、柳瀬睦男先生は今回はおいでになれませんが、いろいろご意見を伺っております。

今日は第一回の会合ですので、皆様ご自由にお話し頂きたいと思っております。

私は幼児保育を専門とする者でありますので、幼稚園や家庭での幼児の生活に数多くふれる機会があり、幼児期の子どもたちが、水や土や、その他自然物で遊ぶ時に、いかに生き生きしており、また、それに打ち込んで遊ぶかを見てきました。砂場で水を流し、その水に手をいれ、土をこね、砂に吸い込む水のあとにできる泡をじっと見つめるなど、砂場で水と砂の遊びを取り上げるだけでも、そこで子どもが経験していることには限りがありません。こんなに子どもが楽しんでやる自然物と取り組む遊びの中

には、人間の成長にとって必要な、いろいろな経験が含まれているのだと思います。このような経験を、自然科学の立場からはどのように考えるのだろうか、あるいは心理学、児童文学の立場からはどう考えるのだろうか、そしてまた、幼児教育の上ではどのように考えていったらよいのかということが、この共同研究での課題であると思います。

今申し上げましたように、幼児の日常生活や遊びの中に自然認識に関連する資料は沢山ありますので、どこかに焦点を絞って、いろいろの立場から関連する資料や意見を報告して頂くというような方法で、今後この研究会を進めてゆくことになろうかと思えます。計画としては、水や土、生きもの、天体、運動、時間、空間などいろいろ考えていますが、基本的なものをいくつか取り出して、今後の会合を進めてゆくことになろうかと思えます。今日はこのことも頭に置きながら、どうぞご自由にお話し願います。

#### 幼児と科学

山根 私は工学教育と教育工学の両方をやっています。津守さんとは昔からよく識り、もう十年以上前に一回こちらの幼稚園にお邪魔して、自分としては面白い話を沢山聞きました。そこで今の工学の非常に基礎的な考え方を子どもがやっているのを見つけ

まして、とても愉快だったんです。今度ここに来るについて期待したいいろいろなあります。

古い話ですけども、私、戦争中飛行機を作っていました、かなりあちこち旅行をしました。汽車に乗っている時に、子どもたちががまわりにいたりして席が一杯だったりすると、ちょっとそこへ割り込んで行って、子どもたちの前で飛行機の絵を書いてやるんです。そうすると皆夢中になって、それをもらおうと歩きまわって喜んでいる。その間にその席に座っちゃうとか（笑い）、そういう悪いことをしていたんです。戦争に使われた悪いものでも、とにかく非常に子どもは喜ぶわけです。有吉佐和子の書いたものを読んでみますと、大体一番初めは良いものであっても、使えすぎると悪くなるというようなことがあるわけです。ちょっと逆みたいになりますが、むしろ出来たものを、子どもというのはもっと純な形で受け容れる。あるいは、もう一つ本源的なものを子どもが持っているかもしれない。また、子どもが精神性を加味していくようなものとかがあるんじゃないか、そして我々工学者は、子どもが我々の作った物をどういう風に認識していくのか、批判していくのか、そういうったことを見る必要があるんじゃないかと思うわけです。

また我々の作ったものも、他の自然物も、子どもはただ物質的

なものとしてでなく、子どもと心のかかり合いと見ます。このように子どもの自然認識の心によって、我々はもう一回自然というものを見直していく必要があると思います。

そういう関係において我々は自然を認識してそれを利用し、それを細工し、その自然の心を生かしていくというのがやはりエンジニアとしてなすべきことじゃないかと考えるわけです。今の科学というのはこれ以上すすめてもしょうがないんじゃないかというの、もう少し年齢の上の子どもの考えることですが、大体そういう風に思われている段階において科学のあり方、技術のあり方といったようなものを、子どもの自然の認識と身のまわりのものの認識から読みとって、我々の希望を見出したいという風に私は思っていたわけです。この場でそういうようなことが教えられれば私としては非常にありがたいことであると同時に、現在の日本においても必要なことではないかという風に考えるわけなんです。そういうったものを研究してみたい、そういう風な気持ちを持ってきたわけです。

太田 初めにちょっと変な話をします。実は、小学校低学年の理科は現在の状況ではいらぬであろうということを、ある座談会で言ったのです。そうしたら、今や各誌からそれを書けと言われて逃げるのに大騒ぎしているわけです。私は教科別に分けた現



行の方式をすれば、教科だとか教科別の評価だとか、いろいろな弊害が出ているのでいけないので、小学校二年位までは、イギリスなんかの考えのように、幼児教育の延長と考えた方が子どものためには良いんじゃないかという根本的な考え方を持っている。

いわゆる科学教育というのは幼児期にあてはまらないのではないかと、つまり科学教育と銘うってしまおうと、どうも子どもにどうしたら良いかわからないわけです。前に津守君に幼児期のことを考えろと言われた時に、一年間位毎週一回幼稚園に行つて黙って見ていたと言ったんですが、あまりにも忙しくて私にはそんな暇が全然とれません。本当は黙って幼稚園で一年位お子さんを見せてもらつてから幼児の自然についての発言をしたいという気持ちには変らないのですが、今の忙しさではとてもその暇がないので、何とも言えないのです。

幼稚園と小学校というように科学の教育の一貫性を考える現在の風潮に対しては、私は反対です。自然観察というのは非常に大切だと思うんです。子どもの時期に自然の観察をしない子どもなんてあったら大変だと思えます。それが今の小学校の低学年の理科みたいにやられちゃうと、馬鹿げたことになっちゃう。例えば「てこ」ときくと、すぐに支点と計算を思い出すらしいのです。

ところが考えてみると、人間「てこ」なんていうのはそんなに使

つたんじゃないくて、重い物を動かそうとする時にエイとやったのがスタートだったんじゃないかと。すぐに「てこ」というのは支点と計算して力でつり合える関係でしょ。そういう風な枠組でもってあるとこ迄行かなきゃいけないけど、それが低学年に入つて、幼児期までいって「てこ」というのはかくある認識の基礎であるという風にしちゃうと、私はどうも幼児期のものの見方というのは変っちゃうんじゃないかと思つています。むしろここでは皆さんのいろいろな事例を伺つてみたい、そして自分なりに考えてみたいと思つています。

山柘　去年津守先生と話していたら、子どもは水の中でアワが出ているのが大好きだというんですね。これはアワは一つの生命を表わしているんじゃないかということを津守先生がおっしゃっていますけれど、そういう認識を工学者はすると良いと思います。

太田　今度電気通信科学館を作ります時に、いわゆる「ウォルターの亀」というのを作ったわけです。「ウォルターの亀」は、刺激に対して亀が自動的に動くわけです。池のような形をしたワクがありまして下に電流が流れていて、ポンポンと手をたたくと亀が寄ってくるわけです。亀といっても直径五十センチ位の機械なんです。この亀が卵を産めば絶対に生き物です。我々の定義によれば……。ところが一向に生き物という感じがしな

い。よくいうエネルギーの交代もできれば自己の保存もできるという模型ですね、一種の。

一方、早稲田の加藤一郎さんが作っている早稲田ハンドというのが。これは本当に手の形をしているわけです。義手です。早稲田ハンドはちょっとさわるとビーンと電気がつくような、こっちの方がはるかに気持ちが悪いですね。我々が見ていると、機械的にはもちろん精巧なものだけど、どっちが生き物のモデルに近いかというと、これは圧倒的に「ウォルターの亀」の方が近い。ところがやっぱりプラスチックの丸い物が、手をたたくと寄ってきたって絶対に亀には見えない。生命というか何というか、そういう意味じゃ子どもにとって、あぶくの方が生きてるように思える。小さい子にとって……。そこところが非常に難しい。我々の頭で考えた電気的なある生き物の模型といういろいろ機能で分析してこういうモデルを作ったら、生き物に近いんだという物を作っちゃうと、子どもにとっては突拍子もない、なんだかタンカーが走っているのと一緒に思っちゃうかもしれない。難しいですね、こういう所が……。

山根　でも子どもの生き物という概念と違いますものね。生き物というのは、生きた心を感じるものであるって……。

太田　初めはたたいてこっちへ来れば生き物と感ずると思った

のかもしれない。だってポンポンとたたくとこっちへ来るんですよ。そう考えると生きたように思うんですけど、実際にそこに立ってみて、寄ってきたって全然生き物なんて感覚がない。

津守　子どもは風呂場で石けんを与えたら、もう何時間も遊んでいるんですよ。だから何かうるさくなると風呂場へいれちゃう。そんなのいろいろありますよね。幼稚園でも見ていると砂場の水がシャーッとほけると、マンホールの所にあぶくができる。子どもは好きなんですよ。見ていて、何かこれは非常に魅力があるんじゃないかということまでは気がついているのだけれど、どういうわけでどういふことなのか、ということはこういう方の協力を得られないと……。

#### 幼児と時間

津守　先日、物理学の柳瀬睦男先生のところへ伺ったところ、自然認識の根本的な問題として、「時間」について基礎的なことを何回か最初に論じておくと面白いだろうという示唆を頂きました。これは、むつかしい問題をいろいろ含んでおりますが、こちらの方に話題を移してみたいと思います。

熊倉　幼児が自然を認識する際、時間ということが何故大事かと申しますと、幼児が自然界にある水とか土とかいろいろの物

を、いろんな形で認知する際、一体どの段階で、それらの認知した事柄を、時間あるいは空間という枠組を通じて認識するようになるのか、つまり、認知して事柄に時間的、空間的関連性を与える枠組をどのようにして獲得するのかということが、まず問題となります。時間とか空間とかいうものは、たとえばコップなどのように指し示すことはできないわけですが、自然の認識には欠くことのできないもの、自然現象の認知の段階から認識の段階に至るのに、是非とも必要なものであるわけですね。ですから、幼児は、どのようにして、そのような認識の枠組を獲得するのかということ、現場における幼児の実践的な資料の整理及び分析によって何らかの糸口が見出せるならば大変ありがたいし、そうあってほしいと望むわけです。

太田 時間というのは私よくわからないのですけれど、どうも生き物の持っている本来のリズムみたいなものと、時計が入ってくる時間とは違うんじゃないでしょうかね。

熊倉 生物学的時間という……。

太田 この問題は現在盛んに研究されているわけですから、

熊倉 現在我々が使っている時計で示される時間というのは、人類が今迄に持っていた時間観念の中でも極めて新しい、特筆すべき性質を備えています。古代文明社会に見られる時間の観念

は、時間が循環するものだという風に考えられていたわけですが、時計で示される時間は、無限の過去から無限の未来へと一様に流れて行く、線型的な時間であるわけです。このような時間の観念は、歴史的に見ればごく最近のことなのです。この観念が生まれたのは種々多様な要因が複雑にからみ合った結果なのですが、幼児が、人類の歴史的な時間観念の変遷を一足飛びに飛び越えて、時計で示される線型的な時間観念を持つようになるということ、極めて理解し難いことであるように思えるのです。つまり幼児はある段階までは、独自のリズムを持ち、徐々に時計の示す時間に馴染むようになると考えた方がより自然であると思います。

太田 いつも思うんですが、本質的には時計って何だろう。最近、千葉さんという方が中公新書で「生物時計の話」というのを書いておられます。読んで面白い本というのじゃないが、一番面白いのは時差の問題です。

山折 私もそれで一つ大失敗したんです。まだNHKのテレビの始まった頃、小学校四年の振子の実験をやったのですけれど、一番最初は振子をテレビでもって数えてみせるんじゃないかと、みんなに数えさせて測定させるといったような、まず数えさせるといふ所から始めたんです。ただそのムードを盛り上げるために、振子が時を刻むし、音楽も時を刻むというので、はじめに二秒の

周期で「あかとんぼ」を出していった、それから今度は錘を上にあげて短くすると、「汽車汽車ポッポポッポ」を出して、振子の周期とリズムが同じだということをやっていったわけです。指揮者に振子を見て指揮をしてくれと言ったんですが、リハーサルの時はうまくいったんです。それがいよいよ本番になって、こちらも乗り気になって、こういう風になるんですよと言ってやっていたら、いい気持ちになって今度は全然狂っちゃって……。〔笑い〕しまったと思って、それがもつとひどいのは最後に振子のいろいろ長さの違いのを、二倍三倍のを作ったんです。そして「キラキラ星」というのの中に二拍子と三拍子を入れたのを服部公一さんに作ってもらって、録音でやれば良かったんですが、オーケストラを頼んでやったんです。本番だということでいよいよ調子を出してきて、ここでもってこんな風になっているんですよ。なんてやると、連中もそれにのって音楽をやってくれるんだけど、一向に合わないわけですよ。〔笑い〕だから、音楽のリズムと振子のリズムとは全然違うものなんですね。それを一緒にしたものだから、初めに合わせると言ったら合わしたけれど、少し気分を出してくと全然違っちゃって……。そうしたら心理をやっている妹に、そんなの決まっている、人によって時間というのは違うんだと言われて、なるほどと……。それから、少し位時間が遅れたっ

て、僕の間とは違うんだと納得するわけです。〔笑い〕

太田 本當にそうだと思いますね。ソビエトの若い著名なバイオリニストで、機械のように弾く人がいます。一回目を聴きに行った時は、これは天才か神様だと思って、二回目聴いた時は何だかつまらない、三回目は、かわいそうだというあわれみの情……。本當に楽譜とほとんど変らなく弾けるんだけれども曲の解釈がないわけですよ。あれはソビエトの苦しい時期の演奏家だったから、変に曲想を盛るとあとでうるさかったのかな……。〔笑い〕リズムというのは機械的に刻まれちゃうと、人間にとって快適じゃないですね。

山根 それはもう、全然別なものじゃないですか。釣りで重い錘を付けて、もちろん小さいやつです。しかし、そんな物理的な誤差の範囲じゃないんですよ、オケの連中がやるのは。〔笑い〕

太田 でも生き物、人間の特徵は、正確じゃないけど致命的な誤りを犯さない"こと"で、機械に比べれば、例えばマリがこちらに飛んで来ると、その方によける人はいなくて、必ず反対側へよけるでしょう。それと同じことを要素的に分解して、コンピューターにそういうあらゆる情報について自己保存させようとすると、大変なプログラムになるわけです。そういう意味で、ある許容範囲内でもいい加減でいいんじゃないですか。ただその範囲はあ

るようですね。それがあまりずれてしまうと不快感を持つたり、生き物というのはダメになってしまう。生物学的に一般に成り立つ法則性が人間を支配しているという面もありますが、そういう面で人間を見るのは危険だと僕は思いますね。つまり、人間というのは人間自身が持っているある変なメディアフィクションがあるんじゃないですか。私は、自然科学というものは、そこで得られたことが事実になって、それは動かし難いものであって、そして何か社会科学のようなものは非常に便宜的なものであるなどとは考えていないのです。そんな風に考えると、人間はやりきれないと思つて、まあ、自然科学だつて物の見方じゃないかと。例えば素粒子論なんていうのがありますね。素粒子の数が原子番号より多くなつたら、ああいう物の考え方をするのが人間にとって有利か不利かをもう一度考え直してみたらどうかと言ひ出すわけです。それから、生物学なんていうのに合目的性なんていう言葉を徹底的に廃してきたんだけど、どう考えてみてもそれから脱却出来なくなつて来ている。進化という現象を見てみると、とかく合目的性で説明した方が説明がついちゃうね。自然科学者としちゃあんまり出来が良くないんだと思いますよ。自ら考へて、信念を持たないんだから、そういう意味では……。

山耕　　そういう自然科学の宗教に反抗して……。

太田　　理学部というのは非常にそういう宗教があります。子どもというのは、もっと優雅ではないかという感じがするんです。種の枠を越えた、これは浅見先生に何かおっしゃつて頂こうと思つてわざときくのですが、サル気持ちになつてサルを見ようとかね。そんな馬鹿なことあり得ないと思うんです。僕はサルの気持ちが人間にわかるなんてことは絶対にあり得ないと信じているんです。つまりこちら様が考えたサルの気持ちであつて、あちら様が考えた気持ちかどうかわからない。サルだつてという怒られますから具体的な例をあげると、幼稚園でウサギを飼育するでしょ。よく、ウサギが逃げていくのを子どもがワーワー言つて追いかけてるんです。これはウサギの気持ちになつてみるとわからないですね。ことによると狩人に追いかけられるのと同じかもしれませんよ。それからウサギなんて動物は、抱かれるのが大嫌いなんだらうと私は思つているわけです。何となく人間を抱くのと同じような気持ちでウサギを抱くと、動物愛護の精神が出るなんて言うから、私のような皮肉屋が嘘つけと言ふんです。そんな甘つちよろいもので動物愛護なんていうのは、人間の側が勝手に考えたことです。子どもの育て方等も、おそらくお母さんが昔からやつている「アバアバアバ」なんていうのがいいんだらうと思ひます。だつて育つた人間は大体満足に育つているから。

浅見 人間の赤ちゃんにも非常に接触が好きな赤ちゃんと嫌いな赤ちゃんがいるっていうんですね。だから間違っ嫌いな赤ちゃんに一生懸命接触すると、その子がとっても嫌がってうまくいかないという話も聞いたことがあります。

津守 先程の時間のことなんですけれど、柳瀬先生の所に伺った時にとっても面白い話を伺いました。柳瀬先生は「永遠の時間」まあ悠久と言ってもいいんだが、そういう時間と直線的な時間とがあつて、人間はその中間に生きているということをもっと認識しなくてはいけないんじゃないかと。そうでないと段々に生活が目まぐるしくなると、人間は非常に不安になってくる。科学哲学の方ではようやくもう一度中世に目が向けられるようになってきた。時間という問題は、大人として非常に興味があることだが、子どもの時間ということを知ることが出来たら……。

本田 子どもの時間で何ですか。つまり朝起きたときおなかかすいたとか、幼稚園に行かなきゃならないとか。僕、おなかかすいた」というのは相当生物学的なことだと信じているんです。確実におなかかすけばホルモンが出てくるわけですからね。少なくとも移り変りの経験としてある。

津守 時間ということは大変難しいものだから。子どもの保育に携わる大人の時間というのはもっと考えやすい。大人が子ども

を扱っている時に、子どもがまだ何をしたいかよくわかっていないもやもやした時間というのに気がついてみると、子どものもやもやした時間がある程度経過すると、その中から次に子どもがシュッと見つける瞬間がある。そんなことがいろいろあるように思うのですけれどね。

山折 これはまた全然違うのですか。我々だと時間と運動、運動っていうのは時間と空間の関係でとらえますからね。しかし、そんなことは子どもではあんまりないんじゃないのかとは思いますが、その辺も、お話なんかも、長いお話と短いお話なんので時間を変えたり、面白さを変えたりして、どっちが長いとか短いとか、そんなのを調べると何か出てこないですか。要するに面白いのが短い。つまらなきゃ長い。それから本当に長いのと短いのとで数量的関係が出て、それは本来とは違うんでしょうけど。

本田 山折先生から、長いお話と短いお話の違いについてというお話がありました。例えば子どもが短いお話でも本当に陶醉した場合には長くつかまえる。私はそのこと自体に子どもの生きる時間というのが表現されているのではないかと考えて方をしております。普通の時計の時間とは違って、垂直に噴出する時間、あるいは瞬間における滞在、そういう呼び方で考えてみたくなるようなものが、子どもの生きている時間ではないか、そういう

うことを自然科学の先生方は、どういう風にお考えになるか伺いたいと思っています。私共がとらえるような幻想の次元の事柄はどう位置づけるのかなどということ、こういう研究会で少しはつきりさせられたらと考えたりするんです。子どもがどの位正確に時間の単位をつかまえているかということよりも、むしろ子どもが体験する主観的な時間みたいなもの、それを時間と呼んでいいかどうかもわからないんですけれども、そちらを良く知りたいわけです。五分位のお話でも二十分位の滞在をしているように思える子ども生き方、そこに大変興味があるということです。そうなると、自然科学的思考ではどうしようもないことなのかもしれませんけれど。

山根 何か充実感が時間と関係するんでしょうね。

太田 大人でもあるんじゃないですか。

浅見 大人は逆なんですよね。

太田 逆ですか。あつ、子どもは長く経過したと思う。

本田 さあ、それはわかりませんね。

太田 それだと大変おもしろい。そうなんですか。

浅見 私たち自身の子どもの時に過ごした時間がずっと長く感じるということがある。

山根 そういうことは面白いですね。

太田 大人と違って充実感があるというのが、ある種の長さとして認識されるとすれば……。

浅見 子ども自身が今どういう風に長く感じているかというのは、ちょっとなかなか難しいと思いますけれど、後から考えると、そういう傾向があるんじゃないですか。

山根 それはまあ比較できますね。どっちが長かったか位の所で実験的に。でもまあ、分析して表わさなくてもね。それなんかも面白いですね。

津守 子どもがどれだけ意識しているかは別として、瞬間の中に非常にたくさんの方がパックされているということはあると思いますね。

本田 意識するのは大人と同じでしょうか。例えば「もう終わっちゃったの」という言葉が出るというのは、短く意識したことになりそうですよね。ただしそこで非常にたくさんのかたとを経験して陶醉するということはありますから、それを短いか長いかと言われると、わからなくなる。

浅見 短いという気持ちで終わったと言っているのかどうかはわからないですね。

山根 大人でもいい話というのは、その時はすぐ終わっちゃったようだけど、後になって考えるとああいうことも、ああいうこと

も聞いたかなというので、相当充実した内容のある話を聞いた、従って時間も長かったという認識をするのかもしれない。

浅見 八月十五日、世界で一番長い夏」という映画がありましたね。

熊倉 外界からの刺激が強烈であり、かつ我々の側の集中力が強ければ強いほど、記憶された事柄の量が増大するということは十分考えられますね。この記憶の量と時間とがどのように関係するのは良く分りませんが、時間が記憶量と比例して増すのだとすれば、非常に面白い話で、ちょっとの時間でも大変長い時間のように感じられる、つまり時間がのびたように感じられるということも良いかもしれません。

太田 アブストラクトメモリーみたいなものとピクチャリスティックメモリーというある画面を刻みつけているように覚えていく記憶は、その実体が我々にはわからないですね。ある子どもにもお話をしますね。それが画面画面を想定して聞いているんでしょうか。それとも筋として聞く、両方合わさっているのでしょうか。

本田 私は必ずしも画面を想定しているのではないと思えます。紙芝居のようなものを見ながらお話を聞くということとしてはいいと思います。よく物語を聞いてイメージを持つと言いますが、それは必ずしも視覚的なイメージを一つ一つに関して成立さ

せているということではないと思うんです。

浅見 その中に自分が入って活動しているような……。

本田 感じてしまいますし、それこそ膚のイメージとか運動感覚とかいろいろなものが働いておりますから、視覚的映像を持つこともあるでしょうが、常に画面を見ているような状態ではないでしょうね。

太田 今の子どもたちというのはテレビなんかで映像に接しているわけですね。かつての子どもたちとは比較にならない程複雑な映像を見ている。そういうことは子どもにも影響はありますか。

本田 それはございますでしょうね。

堀合 時間というのは生まれてからそれで生活しているわけですね。もしそういう実験ができれば、時間というものをこちらから与えないで生活させた場合に、さっき太田先生がおっしゃったように、おなかがいっぱいとか、生理的なことからみると、どういう風に生活するだろうと思います。私どもの園ではお弁当の時間というのは大体決まっています。こちらが与えていますけど、この間こんなことがあります。私が父兄に話している間に勝手にお弁当を持ってきて食べ始めている。体のリズムでしようか、ちゃんとする時期が来たら食べ始めている。我々は時間で縛られている中で生活している。時間を与えないというわけにはいかない



でしようけど、もっと本当の子どもの体、生活のリズムに合った時間を考えなければいけないのかしらと考えてしまいます。一方人間としての決められた時間と、もっとフリーに使える時間とを共にマツチさせて、子どもの生活の中に入れることも大切でしょうね。

津守　　ここの附属の幼稚園では、時間というのは朝来る時間は決まっているのと、お昼のお弁当の時間は決まっています。が、その間は全然小刻みにしていませんね。その経過を見ると、最初のうちはモタモタしていて、あっちにぶつかったりこっちにぶつかったり、あっちでけんかしたり、こっちでさわってみたりしていながら、今度それが前半だとすると、後半の方はかなり集中して、自分の時間というのになる。自分の時間になるまでは散漫な時間であって、そういう経過をとっていますね。この幼稚園はかなりそうなんですが、それでも登園の時間はあるし、お昼のお弁当の時間は決まっています。

太田　　天体観測をもとにした時間というものを正確にやったわけでしょう。ある時期にそれはどういう意味だったかを考えてみますと、昔、ある探検家がアフリカへ行って、これから月食が来るっていうと大騒ぎをしたっていうことがありますね。文明社会を維持していく以上は、そういう時間を作って、しかも天体的

な運行とビタツと合わせることが決定的に人間にとつて有利であったのか不利であったのかということが、私にはよくわからない。誰かが良いと決めちゃった。だからみんなそれに合わせて作っちゃったわけです。今や、作っちゃったものを元に戻せと言っても、それは私は人間にとつて良いことだったのかなと考えるわけです。それはどうなんでしょうかね。

山根　　昔は夏時間というのは、日の出から日の入るまでを六つに割つて、その時間を明治までやっただけですね。やはりその方が人間中心だろうと思います。少し物理的な時間で幼児の事とちょっと違うのですが、こういう現象があった。大学生を使って（みんな喜んだのですけれど）新幹線が出来た時に、いきなり速度をポンポン読ませたんです。それで連中には時計を持たせて何秒後にどれだけになったかというカーブを書かせるんですね。またテレビでも現象を見せてその時間を各々で測定させるんです。すると非常に緊張しますね。非常に緊張して、自分のそれまでの時間を、これとよく見合わせる効果があり、時間に対する理解度、実体感が出てきます。

津守　　もう第一回でお話が中核にふれてきましたが、今日はこの位にして、また次回を楽しみにしたいと思います。どうもありがとうございました。

# 学校訪問旅行記(その三)

## — 伝統を感じるイギリスの教育 —

村 田 修 子

ユティカでの忙しかったけれども充実感の味わえた参観を終えて、ニューヨークに戻りました。すばらしく大きいけれどもボディが傷だらけで廃車寸前の車の多いことに再びあきれながら機上の人となつて、アルプスを遙か眼下に過ぎてロンドン空港につきました。

出発前「ヨーロッパで一番用心しなければならぬところですよ」と何度も聞かされていましたが、紳士の国といわれているだけに、何となくピンときませんでした。けれども一応の手続きが終つてロビーに出てみて、何だか分かるような気がしました。そこは手押車が氾濫していました。重い

荷物を持って歩かなければならない旅客への全くの親切ということなのでしょうが、余りに多すぎるために、自由に押して歩くことができないのです。チェンジ・マネーのために並ぶにしても、自分のすぐそばまで持つて行くことはできないので、車にのせたまま離れたところへ置きっぱなしになるわけです。ですから鍵をかけてあるのにあけられたとか、なくなるといふ事故もおこるのは当たり前と思われる混雑振りでした。でも私共は気心知り合った同志で交代に手続を済ませることができるので、一人ぼっちの旅でない心強さ、というものをいやというほど感じました。トラベラーズチ

ェックを握りしめて並びながら「心遣い、というようなものも、違った立場から見た場合には、必ずしもその真意通りではなくなることもあるものだなあ」と思ったとたんに、アメリカのナーサリーで見た光景を思い出してしまいました。

それは、どこでも部屋の中に水遊びができるようになった足のついた箱がありました。子どもたちはビニールの上衣を着せてもらつて、オレンジ色などの色のつけてある水を、あつちの入物に入れたり、物を浮かしたり、ビニールのホースを口にくわえて吹いてぶくぶくさせていました。面白いに違いないですが、見ていて余り衛生的

## 水遊び用の箱



ではないと感じてしまった。どうなることかと見えていますと、子どものことですから大人の考えた吹く活動(多分これを経験させるためのものと考えられます)をするだけではなく、吸うこともやるわけです。吸って口に入ったのを出したりというわけで「ノー、ノー」と言っているとめてみても小さい子のことですから、道具がある以上繰り返します。本当の先生は、と思って見ますと、一応止めますけれども、余り神経質に扱ってはいませんでした。大して関係のない事なのにこのようなことが何故か頭に浮かんできました。

何でも、子どもとのかかわり合いにおいて考えることが身についている自分に、ふと思い当たった一瞬でした。

無事何事もなくバスに乗り込み、日曜出勤に当たったため、ガールフレンドをつれた若い男の子の運転手によってロンドン市街は通らず、一路イギリスの中央部あたり、

ストーク・オン・トレントという訪問地へ三時間半ひた走りに走りました。

その間機上でのつかれや、地上を走っているという安堵感もあるのでしょう、ねむっては目を覚まし、そしてまたねむる、という状態でしたが、目を覚ましたときにあたりの光景を見まわすと、その度ごとに同じところを走っているように思えるほど、左右とも広々とひらけた牧場と、そこに草をはむ牛、馬、羊の群、何やら白い鳥の群、遙かに小さく見える牧舎、というわけで「一体、イギリスってこんなに大きかったかしら、日本とイギリス本土ではどっちが大きかったのかしら」と考えるほどののびやかな風景でした。

そのうち、パーミンガムの林立する煙突や煙に、川崎あたりの様子を思い出しながらハイウェイをおり、もと炭坑のあったというストーク・オン・トレントという静かな町の由緒あるらしいホテルに着きました

▲  
めずらしい煙突



た。

国旗をはためかせたこのホテルの周辺の家々は、屋根に小さくかわいらしい煙突を固めて何本ものせているのが見られないためか、私には大変珍しく、異国情緒をそそられて、すぐ写真をとって回りました。

以前石炭をたいて暖をとっていたとき、ひと部屋に一つずつある暖爐に一つずつ煙突がついていたとのことで、その数をかぞえればその家の部屋数が分かるのだそうです。

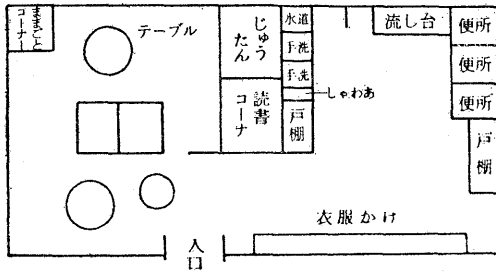
多くの家は煉瓦作りでどっしりと落ちていますし、その町の中を、すその線がふくらみをもって如何にも安定した型のミニ・クーパーという、日本では余り見掛けない車がたくさん走っています。何といっても総てに落着きがあつて気分が安まりました。古いものを大切に残し、それを誇りにしているイギリスらしさを感じました。

\* \* \*

学校訪問は、午前一校、午後一校というスケジュールなので、アメリカでの経験も加わって一同安定感を持って参加することができました。訪問について一切の世話を下さったミス・スタブスは就学前教育を担当しておられる方でしたが、非常に美しく理知的で、その上大変やさしい方でした。

まず話し合いの時、私共が「キンダーガートン」ということばを使いますと、「イギリスではそれは使いません。ドイツ語ですから。ナーサリーという呼び方をします」といわれました。そして一九七〇年の学校制度の改革について、インファント・スクールはファースト・スクール（五歳―九歳）に変わり、ジュニア・スクールはミドル・スクール（八歳―一二歳または九歳―一三歳）になったと言われました。そして

## ▲ ナーサリー・クラスの部屋



ナーサリーにはナーサリー・スクールと、ナーサリー・クラスとある、と聞かせてくれました。

### ○ ナーサリー・スクール

三歳から五歳児で、ヘッド・ティチャーがいること、その他資格を持った先生や、ナーサリー・ナースで構成されていて、これが現在二校あって、子どもの数は最大が一五名、最小のところが三〇名ということでした。

### ○ ナーサリー・クラス

ファースト・スクールに併設されていて、入学の資格は全くナーサリー・スクールと同じだが、ここにはヘッド・ティチャーはいない。今後はこのナーサリー・クラスの増設に政府は力を入れている。それは次のような理由によるとのことです。

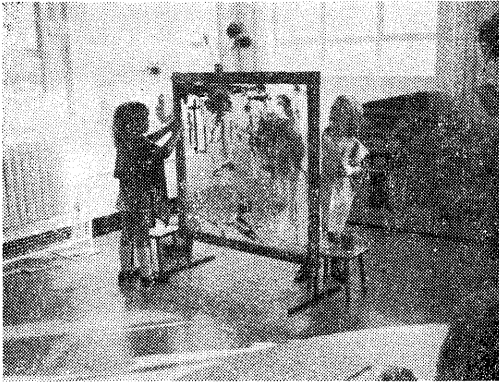
- 子どもが同じ学校に行ける。

- ヘッド・ティチャーがいないので経済的に費用が少なくてすむ。

以上の二つではどういことが行なわれているかという例を二、三あげてみます。

上図のような三歳、四歳児の部屋で、

- 小麦粉をしめらせて作った手首大の固まりを伸したり、型押しをしている。
- 好きな絵を細いマジックで書いている。
- のりをノート大の紙に一面につけ、かぼちゃの種や木の実、種、マカロニをはりつけている。
- 大版のついたたてのようになったガラスにポスターカラーで絵を書いている。
- 色のついたせっけん水をストローで吹き、あわが出たら用紙につけて模様をつけている。
- 好きな色をスポイトに吸いあげ、大きな容器の中の水にたらし、その上から画用紙をかぶせて、画用紙につく色模様を



◀ ガラスのついたてで  
大きな絵をかく子ども

楽しむ。

• こわれた時計とかラジオなどをいじったり、分解したりして遊ぶ。

次頁の図は、あるナーサリー・クラスでの配置図ですが、四歳―五歳の一三名の部屋に担任一名と、助手が一名で、  
A、カードによるリーディング。  
B、新聞紙をまるめて芯にして、二人組んでへびを作っている。

C、はさみで切ることと、ピクチャパズルをしている。

D、絵本によるリーディング。  
E、自由に絵を書く。

以上をみると、日本の幼稚園と同じですが、人数が少ないので、それぞれの子どもをよくみて指導していることがよく分かりましたし、子どもの態度も礼儀正しく、対人関係の躰の面もよくゆき届いた感じでした。

た。

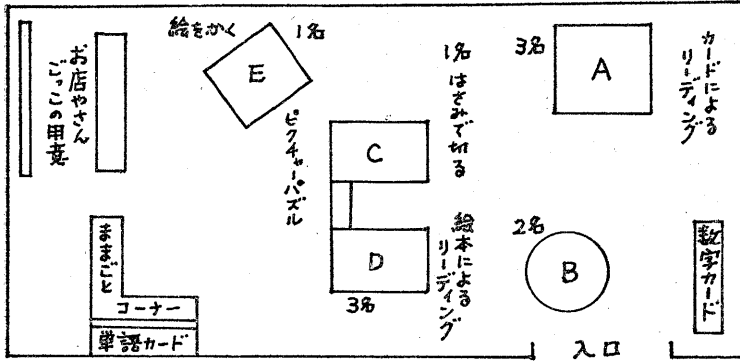
けれども、ここでも広々とした庭を使うとか、運動具を使うとかいう姿は余り見られないことはアメリカと同じで、不思議な感じがしました。子どもたちが大好きな砂遊びも、日光に当って外でするよりも部屋の中の床に砂のコーナーがあったり、砂の入った箱があって、そこでやっていました。

私が幼稚園につとめはじめた頃、お茶の水の幼稚園にも室内に砂遊びの箱があって、雨の日はよくそれが使われ、私はいつも外へこぼれた砂をはき集めていたことを何年か振りに思い出しました。

このほかにデイ・ナーサリーと呼ばれるものがあります。

○デイ・ナーサリー

これは普通の教育機関には属さないで、



社会事業の一つで、社会奉仕的な性格のもので、ストークにはこれが七施設あって、〇歳—五歳までの子どもで、次にあげる条件に当てはまる子どもたちが入っています。

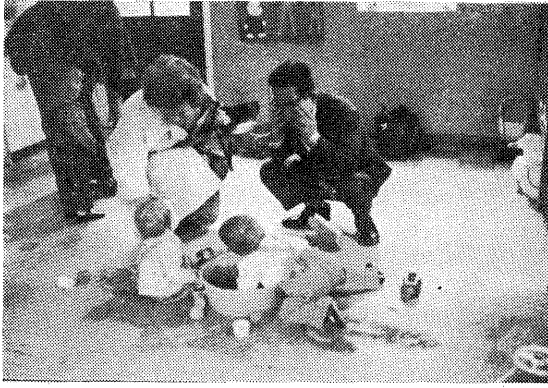
- 両親のそろっていない子
- 病気の子
- 身体的障害のある子
- 心に障害のある子

ナーサリー・スクールでは、学びとらせことを目的としています。デイ・ナーサリーでは、世話をすることにポイントをおいています。そして保育時間も七時四十分か八時から一八時迄で、(七時三〇分—三時三〇分と一〇時—一八時の二班で交代する)職員は資格のある先生のほか、ナーサリー・ナースと、パートタイムの助手、給食関係者など、ここでも一二分の人数の人が当たっていました。世話をすることに

ポイントをおいているといっても乳児室を除いては、ナーサリー・スクール等と同じようなことをしていました。乳児室は〇歳—二歳までの六名がいて、ナースにだかれ、下着をとりかえてもらっていました。

驚いたのは、一歳二か月位の子が床に座り、置かれた入れ物の中から砂をつかみ出して、砂の中で遊んでいました。口に入れ、目をこすったりするのではないかと心配になりましたが、先生方は余り気にならならしく、長いことやらせていました。でも大人がそばにいくと首をあげてじいっと見つめたり、手を出して抱いてほし いゼスチャアをしました。通訳担当の高校の男の先生が一寸手を出すと、抱いてほしかったらしく、失礼ながら余り赤ちゃんを抱ききれない感じの先生から離れなくなりましたことなども、朝早くから親の所を離れていることを考え合わせて、ふびん

◀ ナーサリーで乳児と遊ぶ一行



に感じました。

けれども全体的に子どもたちの顔は明るくて、活動を楽しんでいるように思いました。この点は、私がばく然と抱いていたアメリカとイギリスとは少し違った感じでした。

参観はさておき、印象的だったことを少しあげてみます。

● 第二日目、私共の班を迎えにきてくれたバスはなんと、みんなが乗りたいと思っていた赤い二階バスでした。みな喚声をあげてのりこみ、一行一名はみな二階へ行き、下は運転する人だけというツァーになりました。

● あるファースト・スクール参観のとき、女の校長先生が自ら音楽を通して子どもたちの心情を育てていることが特徴という点で、大きい人たちの美しい合唱、合奏で迎えてくれました。十月半ばとい

ってもはだ寒い気候です。でも校長先生は半袖のスタイルで、首には教育のためにつくした人のもらう勲章をかけて張り切っていらっしやいました。私共が「それを見せて下さい」と頼んだところが、一たん手をかけてはずしそうになりましたが、すぐやめて「これをとるときれいにした髪が乱れますから……」とのことで身からお離しになりませんでした。

● イギリスでも毎日案内して下さったのは、ミス・スタブスという美しい方でした。毎日我々のふところ工合を考慮に入れてのことか、教育委員会などのあるユニティ・ハウスというところの食堂で昼食がとれるように計らって下さいました。その庁舎に働いている人たちにまじり、一列に並んでセルフサービスで自分の好きなものを注文してお盆にのせてゆきます。流れてゆくので、取りたいものがとれなかったり、フォークなど取りそ



こねると、ミス・スタブスは素早く足りないものを見付けて補充してくれますし、支払いのところでは、一人一人の財布の中をのぞき込み、その様子によっては、一人ずつに教えながら丁度よく硬貨をつまみ出してくれます。そこへは分かれて参観していた三班とも集まるので、そのお世話はともつかれた事でしょうとあとで話し合ったほどです。

●またある学校でやはり音楽の演奏をきかせて下さったとき、背中合わせに用意されている二台のピアノで、男女二名の大人が伴奏をしていました。その男のほうの方はこの学校の用務員さんだという説明があつて驚きましたが、同時に音楽に對する幅の広さ、生活の中にとけ込んでいる音楽というものを感じました。

それにしても兩國とも、幼児期の教育にたずさわっている方々は大部分が女の方

で、しかも美しくてやさしい上に、堂々としておられるのには感心しました。

また委員会のまとめをしている方たちや、ファースト・スクールの先生方も、就学前教育を担当している先生方に協力して教育が進められている雰囲気を感じられました。

日本でも問題となつているそのへんのつながりがある程度成功しているのは、ナリー・クラスという併設された就学前教育を重視していることの成果ではないかしらと思ひます。

\* \* \*

ストーク・オン・トレントは余り大きな都会ではないし、危険なことも聞かないので、時間があれば歩いてみることにしました。

朝早く起きて先ずホテルの周りを回り、ポスト・オフィスのあるところを探し出し、記念切手を売り出す日を見付けた

り、昔の様子が残っている煉瓦の道、壁の場所を見付けてそこで写真をとりました。

ところが、煉瓦の凹凸は微妙な、思つてもいないような色彩が出てくるのが分かつて、古きよきものを発見しました。

なれてきたとはいつても、やはりおかしいことも多くありました。

●朝やつと開いた郵便局の窓口で切手を買うとき（九ペンスの切手を十枚下さい）というのを「キューペンス テン」と言うとの係の人は分らない顔をして、

「ツーペンス？」

「ノー、キューペンス テン」

「？」

暫くしてやつと気がついて、

「オー、アイムソーリー、ナイン、ペン

ス テン」

数字は万国共通ということから、こういう錯覚も起こつて大笑いしました。

●ホテルでは今話題のスノードン卿と二晩も食堂で一緒になりました。ロングドレスのレディたちのダンスパーティなどあったりして、外国の上流社会の雰囲気もぞくことができました。静かにそして大体二時間位かかる食事については、その時間をもったいながる日本人的な人と、それを楽しむムード派とに分かれました。その食事の終りには必ずケーキが出てきます。メニューに「バナナ・ガトウ」とありました。メインの食事がすんで、例によりケーキが出てきたのを平らげたのに、あるところから声があり、

「バナナ、こねえな」

「今日はバナナ・ガトウです」

「ああ、バナナマトウか」

こういうことなど声を出して笑ったので、上流社会の人たちに、ジロリとされたひとこまもありました。

ストークでの三日間の訪問は、さらっとしているけれども暖かいふれ合いの毎日、忘れることはできません。

長い道を再びバスでロンドンに戻り市内を見学し、ウェストミンスター寺院のステンドグラスの美しさに感嘆し、有名な人の墓を踏みつけて歩かなければならないことに耐えかねて、つま先立ちし、またいで通ったことは一番印象深いことでした。一本の木、一軒の家、どこを見ても絵になる光景はうらやましい、というほかありません。

ここまではイギリス的に言うと「ゴージヤス・デイ」でした。

二日目、郊外にあるウィンザー城へ出かけるときから名物の霧にお目に掛り、霧のウィンザー城を見学してから今迄とはがらっと違った苦勞の旅が始まりました。

(つづく)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 幼児の教育 第七十五巻第七号

七月号 © 定価二〇〇円

昭和五十一年六月二十五日印刷

昭和五十一年七月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

# 昭和51年度 フレーベル館 現代幼児教育研究会開催について



フレーベル館現代幼児教育研究会は、去る昭和40年に発足以来、幼児教育に携わる全国の先生方に親しまれながら発展してまいりました。昨年度は11年目に当り、全国の諸先生方のご意見、ご要望を十分に検討させていただき、実施致しましたところ、多大なるご好評を賜り、有難くお礼申し上げます。今年度は、昨年度に引続き、地区研究会を、全国各地において年間15ヶ所で開催する計画を立て、全国大会は休会と致します。また、内容的には、より実践的なものを主体として、実施致すことを計画致しております。

今後、実施時期に応じて、各地区毎に、担当店よりご案内状をお届け致しますので、先生方の一層のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

**フレーベル館現代幼児教育研究会事務局**

〒101 東京都千代田区神田小川町3の1 TEL(03)292-7781(代)

水遊びは夏の体カシベツに最適です。

# フレーベル館の水あそび用品



●魚つりセット 2,900円  
魚15尾 つり竿5本 プラスチック製



●バケツ  
4個1セット 2,300円  
プラスチック製

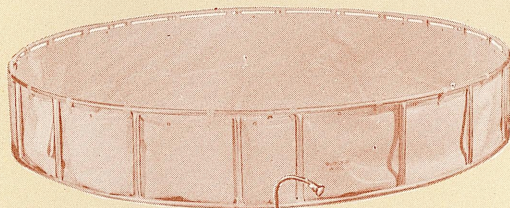
●キンダーカラーすのこ  
1枚 8,000円  
長さ180cm 幅42cm  
赤・黄・緑・青の4色  
プラスチック製



●ジョウロ  
8個1セット 3,700円  
ピンク・グリーン各4個 プラスチック製



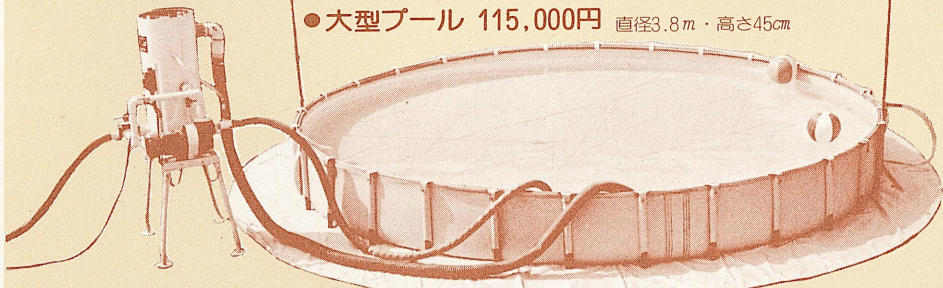
●キンダープール(A) 92,000円  
高さ45cm・直径2.8m・排水管50cm  
特殊特厚ビニロンターボリン製



●プール用滑り台  
38,000円  
高さ93cm  
滑り面38cm×180cm  
本体：鉄パイプ  
滑り面  
プラスチック製



●大型プール 115,000円 直径3.8m・高さ45cm



↑濾過装置 280,000円

↑グランドシート 34,800円

☆くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL東京(03)292-7781(代)にお問い合わせ下さい。

## フレーベル館